

南琉球宮古語新城方言における動詞形態論

王, 丹凝

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

45

(開始ページ / Start Page)

139

(終了ページ / End Page)

201

(発行年 / Year)

2022-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030158>

南琉球宮古語新城方言における動詞形態論

王 丹 凝

1 はじめに

本稿の目的は、南琉球宮古語^{あらぐすく}新城方言（以下、新城方言）の動詞形態論を網羅的に記述することである。宮古語諸方言の記述は琉球語研究の中でかなり進んでいるが（下地来間方言：杉村2003；伊良部長浜方言：Shimoji 2008, 下地2018；大神方言：Pellard 2009；池間西原方言：林2013；狩俣方言：衣畑・林2013；下地皆愛方言：セリック2018, など多数）、新城方言を対象にする先行研究はこれまでほとんどなかった。動詞形態論、とりわけその活用（屈折形態論）を網羅的に扱った研究は存在しない。本稿では新城方言の動詞屈折形態論に焦点を当て、その網羅的な記述を目指す¹。

本稿の構成は以下の通りである。2節で新城方言の概要を紹介し、3節で動詞の内部構造を示し、各部分について詳述する。4節で語幹クラスについて述べ、5節では、屈折パラダイムを示しながら、屈折接辞ごとに記述する。6節では存在動詞、コピュラ動詞を扱う。最後に7節において全体のまとめと今後の課題を示す。

2 新城方言の概要

本節では、新城方言の概要である、まず2.1節で新城方言の地理と系統について、2.2節で音韻論、特に本稿の記述と大きく関わっている形態音韻規則について紹介する。続いて、2.3節で本稿の記述の諸前提（グロスの振り方、語の認定基準など）を導入する。

2.1 地理と系統

琉球諸語は、喜界島から沖縄本島（およびその属島）にかけて話されている北琉球語と、先島諸島（宮古列島、八重山列島）で話されている南琉球語に分かれる（図1、ペラール2013）。新城方言は宮古島旧城辺町新城地域（図2の丸枠）で話されており、系統的には南琉球宮古語（図1の四角枠）に属する。

¹ 本稿は王（2019）に大幅な修正を加えたものである。

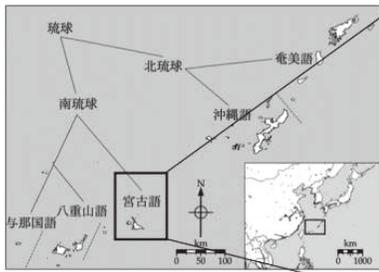


図1 琉球列島 (ペラール2013: 84)



図2 宮古島と新城

新城方言の調査は、2018年11月から2021年にわたって現地もしくはオンラインで行った。主な調査協力者は2人である (TN氏 (女性, 1950年生まれ, 新城出身), TM氏 (男性, 1949年生まれ, 新城出身)。二人とも言語形成期を新城で過ごし、現在は平良市に移住している。

2.2 音韻論

以下、本文中で形態素に言及するとき、特別な理由のない限り、基底形を用いてそれらを指し示す。新城方言の音韻論に関するより詳しい情報は王 (2019) を参照されたい。

(1) 本文中の表記：

[x] : 音声表記； /x/ : 表層の音素表記； //x// : 基底の音素表記

2.2.1 音素

新城方言には、6個の母音 (表1), 16個の子音 (表2) と2個の半母音 (/j, w/) を認める。

表1 母音音素

	前舌	中舌 ²	後舌
狭	i [i]	i [i]	u [u]
半狭	(e [e])		(o [o])
広	a [a]		

表2 子音音素

		両唇	唇歯	歯茎	後部歯茎	軟口蓋	声門
阻害音	閉鎖音	p [p]		t [t]		k [k]	
		b [b]		d [d]		g [g]	
	摩擦音		f [f]	s [s~ɕ], z [dz]	c [ts]		(h [h])
共鳴音	接近音		v [v~ʋ]	ʒ [ʒ~ʐ]			
	鼻音	m [m]		n [n~ɳ]			
	弾き音			r [r]			

母音は /a, i, u, ɪ, e, o/ の6母音体系である。/e, o/ は借用語に偏るため、括弧に入れておく（例：/eego/ 「英語」、/otoo/ 「お父さん（呼称）」）。/i/ はオンセットなしで立つことができず、かつオンセットが摩擦音 /f, s, c, z/ に限られる。本稿において、/i/ は基底で存在せず、形態音韻規則によって挿入するもの（2.2.4節）と分析する（例：//pus// → /pusi/ [pusi] 「星」）。二重母音は /ui, ai, au/ がある。

子音は /p, t, k, b, d, g, f, s, c [ts], z [dz], v, ʒ [ʒ~ʐ], m, n, r [r~ɽ], h/ がある。子音は有声と無声の対立のある阻害音と、対立のない共鳴音に分かれる。両者は音素配列上、異なる振る舞いをしており、阻害音は音節主音にならず、語末のコーダにも立てない一方、共鳴音は音節主音にも音節副音（オンセットなしコーダ）にもなる。/h/ は借用語にのみ観察される（例：/hanako/ 「花子（人名）」）。

半母音 /j/ は後舌母音 /a, u/ の前にのみ観察される（例：/jaa/ 「家」、/junai/ 「夜」）。/w/ は後舌母音 /a/ の前にのみ出現し（例：/waa/ 「豚」）、限られた語彙にしか現れない。

2.2.2 音節とモーラ

単純語の音節構造とモーラの対応を表3に示す。語頭に限られる音節を準音節と呼び、それ以外の音節を正音節と呼ぶ（用語は下地2018：15に倣う）。

準音節には共鳴音1つ（例：/m.ci/ 「道」、Rn.CV）か、2つの同一共鳴音（例：/mm.ma/ 「芋は」、RnRn.CV）のみが立つ。

正音節におけるオンセットスロットは全ての子音音素と半母音が立ち、Gスロットには半母音の /j, w/ がたち、その際、/Cw/ の場合のC₁には /k, g/ のみがたつ（例：/kwaasi/

² 当該音は伝統的に「中舌母音」（平山1964）や「舌尖母音・舌尖母音」（崎山1963、上村2000など）と呼ばれているが、新城方言において調音音声的調査はまだ行っておりず、聴覚印象でのみ確認したため、「中舌母音」なのか、「舌尖母音」や「舌尖母音」なのか、まだ判断できないが、便宜上、当該音を「中舌母音」と呼び、調音音声的調査は今後の課題にしたい。

「お菓子」, /gwansu/ 「祖先」)。語頭重子音は無声摩擦音/ff, ss, cc/と共鳴音/mm, vv, žž, nn/が立つ(例:/ffa/「子」, /žžu/「魚」)。音節主音には全ての母音以外に, žも立ちうる。その際, オンセットは/p, b, k, g, m/に限られる(例:/pagž/「足」, /kžn/「着物」)。コーダC₃のロットには無声阻害音(例:/bas.sir/「忘れる」)か共鳴子音(例:/an.na/「母」)がたつが, 語末の場合では共鳴子音のみ許容される³(例:/im/「海」, /in/「犬」, /av/「口喧嘩」, /paž/「蠅」)。

表3 単純語の音節構造(用語は下地 2018に倣う)とモーラの対応

準音節		正音節					
#((Rn)	Rn)	((C _i)	C ₁	(G)	V ₁	(V ₂)	(C ₃)
μ	μ	μ	—	—	μ	μ	μ

次に, モーラについて述べる。新城方言では, 1語が少なくとも2モーラ持たなければならないという最小語制限(minimal word constraint)がある。以下, 2モーラの例を挙げる。

(2) 2モーラの例

- a. /mm/ 「芋」 (RnRn) g. /im/ 「海」 (VC)
- b. /mci/ 「道」 (R.CV) h. /aa/ 「粟」 (VV)
- c. /mmja/ 「もう」 (CCGV) i. /au/ 「青」 (VV)
- d. /ffa/ 「子」 (CCV) j. /maju/ 「猫」 (CV.CV)
- e. /kaa/ 「皮」 (CVV) k. /uja/ 「親」 (V.CV)
- f. /kam/ 「神」 (CVC)

2.2.3 /ž/と/i/の分析について

宮古語には, 摩擦を伴う「母音」が広く観察されている。本稿において, 位置付けを定める前に, 便宜上, 狩俣(2018)に倣い, 「当該音」と呼ぶことにする。該当音をどう分析するかは宮古語の音韻論で長く議論されている問題である(狩俣1986, 青井2012, 下地2018, 狩俣2018など多数)。先行研究を踏まえながら, 新城方言の該当音を分析すると, 以下の分析案が挙げられる。

³ 共鳴音rがコーダに立つ例が確認できておらず, 動詞形態論において, r語幹がコーダに立つ場合, žに変わる(2.2.4節, 4.1.1節に参照)。

表4 該当音の分析案

	案 (A) :	案 (B) :	案 (C) :
	中舌母音	音節主音の子音	2音素に分かれる
[² i:u] 「魚」	/i <u>i</u> u/	/ž <u>ž</u> u/	/ž <u>ž</u> u/
[pa ² i] 「蠅」	/pai/	/pa <u>ž</u> /	/pa <u>ž</u> /
[b ² ida] 「低い」	/bida/	/b <u>ž</u> da/	/bida/
[k ² in] 「着物」	/kin/	/k <u>ž</u> n/	/kin/
[² i:] 「おにぎり」	/i <u>i</u> /	/ž <u>ž</u> /	/ž <u>ž</u> / (RnRn) or /i <u>i</u> / (VV)

本稿において、案 (B) の立場をとり、当該音は音節主音の子音ととして分析する。

まず、案 (A) は全ての環境において、中舌母音として分析する。案 (A) をとらない理由は2つある。第一の理由は体系性にある。[²i:u]「魚」における摩擦雑音を母音としてみると、VVVになり、新城方言において、3母音連続を認めないという一般化 (cf. //mii-i// (見る-SEQ) に対し、母音削除規則が義務的に適用され、/mii/「見て」になる) の例外を認めざるを得なくなり、体系性を損なうことになる。第二の理由は母音始まりの接辞が後続する際の形態音韻規則にある。母音始まりの接語が後接した場合、表5に示すような形態音韻論的交替が見られる。

表5 母音始まりの接語が後接した場合の形態音韻論的交替

	主題 // =a//	対格 // =u//	例	
語幹末	=a	=u	主題助詞	対格助詞
-C	-C _i =C _i a	C _i =C _i u	/kam=ma/ (神は)	/kam=mu/ (神を)
-V ₁ V ₂	-V ₁ V ₂ =ja	-V ₁ V ₂ =ju	/mii=ja/ (目は)	/mii=ju/ (目を)
それ以外X	-X=a	-X=u	/pana=a/ (花は)	/pana=u/ (花を)

母音始まり接語が長母音や二重母音に接続する際、半母音のjが義務的に挿入される。例えば//mii=a// (目=TOP) → /miija/「目は」、//kui=a// (声=TOP) → /kuija/「声は」になる。[²i:u]「魚」における摩擦雑音を母音としてみると、後ろに母音始まりの接辞がつく場合、j挿入規則の適用により、*/iija/になるはずであるが、そうはならない。[pa²i]の時も同様、/pai/として分析すると、語幹末が二重母音になり、j挿入規則の適用により、*/paija/として出力されるはずであるが、子音のように、語幹末がコピーされて、/paiia/[pazza]の形になる。以上、案 (A) は「魚」と「蠅」に対する分析に体系性に損なうため、案 (A) を採用しない。

案 (C) は音節主音に立つものを中舌母音 i [i-ʃ-z]と、それ以外は共鳴子音 ž [z]として

みる分析である。案 (C) をとると、2.2.4 節に後述する i 挿入規則だけで、摩擦音 /f, s, c, z/ 終わりの語幹と、当該音のオンセットに立ちうる /p, b, k, g, m/ 終わりの語幹を一括で説明できる (//mac-tar// 「待った」 → /macitar/ [macita:], //kak-tar// 「書いた」 → /kakitar/ [kakšta:]). しかし、//pagi=a// 「足は」 が*/pagga/ にならず、/pagzza/ になることを説明できない点において、上記の案 (A) と同じ理由で、案 (C) を採用しない。

案 (B) の子音説をとるなら、上記の名詞形態論において問題が生じないため、案 (B) の分析にし、共鳴子音が音節主音のスロットに立つことを認める。その際、オンセットが5つに限っている (例: pžtu 「人」, bžda 「低い」, kžkararin 「聞こえない」, pagž 「足」, mžcjaaž 「3人」)。ただし、案 (B) にも欠点がある。案 (B) の分析に従うと、動詞形態論の分析する際、他の語幹の屈折に見られないž挿入規則を立てる必要がある (例えば、//kak-tar// (書く-PST) → /kakžtar/ 「書いた」 vs. //jam-tar// (痛む-PST) → /jamtar/ 「痛んだ」)。本稿において、経済性より、体系性を第一に考えて、案 (B) の分析にする。

2.2.4 新城方言の動詞形態論に関する形態音韻規則

本節では動詞形態論に関わる形態音韻規則を概観する。それぞれについての詳細は4節と5節において、具体的な事例を扱いながら再度導入する。

(3) 中舌母音 i 挿入規則:

不適格な子音連続 (異なる阻害音の連続, 阻害音の直後に共鳴音が立つ連続) および語末の阻害子音を避けるために、i が挿入される。

表6 中舌母音 i 挿入規則の具体例

		入力	i 挿入	出力	
語幹 内部	阻害音と阻害音の連続	a. //asp-i// (遊ぶ-IMP)	/asipi/	[asipi]	「遊べ」
	阻害音の直後に共鳴音がたつ連続	b. //sn-kka// (死ぬ-CND)	/sinkka/	[sinkka]	「死んだら」
語末	阻害音が語末	c. //tuz#//	/tuzi/	[tuzi]	「妻」

(4) 中舌母音 i 拡張規則:

無声阻害音からなる重子音終わりの動詞語幹に、i 挿入規則が適用された場合、さらに i 拡張規則が適用される。

表7 中舌母音i拡張規則の具体例（動詞の例）
 (-tarが直説法過去肯定接辞, -Øが直説法非過去肯定接辞)

	入力	i挿入	i拡張	出力（音声実態）	
ff語幹	a. //ff-tar//	/ffitaa/	/fiitaa/	[fi:ta:~ fo:ta:]	「降った」
	b. //ff-Ø//	/ffi/	/fii/	[fi:~fu:]	「降る」
ss語幹	c. //ss-tar//	/ssitaa/	/siitaa/	[si:ta:]	「知った」
	d. //ss-Ø//	/ssi/	/sii/	[si:]	「知る」

以下の(5)(6)(7)はr語幹に関わる規則である。

(5) r脱落規則：

以下のA, Bの異なる環境において, rが脱落する。

環境A（随意的） r→Ø / V__i

環境B（義務的） 過去・肯定接辞-tarが語末に立つとき, もしくは存在動詞とコピュラ動詞語幹（ur「いる」, ar「ある」と(j)ar「である」, 詳しくは6節を参照）に一部の接辞が後続するとき, 末尾のrが脱落する。その後, 以下に述べる代償延長規則が適用される。

(6) 代償延長規則：

形態音韻規則による脱落や融合によって, モーラ数が減る場合, 元のモーラ数を守るために, 代償延長規則が適用される。

表8 r脱落規則と代償延長の具体例 (r脱落Aは「環境Aが関与するr脱落」を意味する)

入力		r脱落A		出力	
接辞-rari (-PASS)	a. //mii-rari-Ø//	/miirai/		[mi:rai]	「見られる」
指示詞 kuri ⁴	b. //kuri//	/kui/		[kui]	「これ」
指示詞 uri	c. //uri//	/ui/		[ui]	「それ」
指示詞 kari	d. //kari/	/kai/		[kai]	「あれ」
入力		r脱落B	代償延長	/i/挿入	出力
接辞-tar (-PST)	e. //mii-tar//	/miita/	/miitaa/	N/A	[mi:ta:] 「見た」
ur 「いる」	f. //ur-tar//	/uta/	/uutaa/	N/A	[u:ta:] 「いた」
	g. //ur-Ø//	/u/	/uu/	N/A	[u:] 「いる」
ar 「ある」	h. //ar-tar//	/ata/	/aataa/	N/A	[a:ta:] 「あった」
	i. //ar-Ø//	/a/	/aa/	N/A	[a:] 「ある」
(j)ar 「である」	j. //(j)ar-tar//	/(j)ata/	/(j)aataa/	N/A	[(j)a:ta:] 「であった」

(7) r→ž規則

コーダに立つrがžに変わる

(ただし、適用順序はr脱落B規則と代償延長規則より後である。)

表9 r→ž規則の具体例

	入力	r脱落B	代償延長	r→ž	重子音化 ⁵	出力
tuur 「通る」	a. //tuur-Ø#// (通る -NPST)	N/A	N/A	/tuuž/	N/A	[tu:ž] 「通る」
	b. //tuur=a// (通る =TOP)	N/A	N/A	/tuuž/	/tuužža/	[tu:žža] 「通るのは」
ur 「いる」	c. //ur-Ø#// (いる -NPST)	/u/	/uu/	N/A	N/A	[u:] 「いる」
-tar (-PST)	d. //tar//	/ta/	/taa/	N/A	N/A	[ta:] 「～た」

(8) 語幹末c / t交替規則 (動詞屈折論に限る；詳しくは4. 1. 2節を参照されたい)

c終わりの語幹に連結母音a (連結母音については3. 3節を参照) を要求する屈折接辞が後続する際、c/tの語幹末交替が義務的に生じる。

⁴ cf. //kuri=a//→①母音融合/kurja/→②代償延長/kurjaa/→[kurja:] 「これは」

⁵ 重子音化規則：語幹末子音と共鳴音が、母音始まりの接語に直接後続される場合 (//C//+//=V//), 重子音化規則が適用され、/C_iC_iV/になる。

表10 語幹末c/t交替規則の具体例（動詞 mac「待つ」を例に）

入力		c/t 語幹	i 挿入	出力	
mac 「待つ」	a. //mac-a-n// (待つ -THM-NEG)	/matan/	N/A	[matan]	「待たない」
	b. //mac-a-ttan// (待つ -THM-NEG.PST)	/matattan/	N/A	[matattan]	「待たなかった」
	c. //mac-a-di// (待つ -THM-INT)	/matadi/	N/A	[matadi]	「待とう」
	d. //mac-a-daan// (待つ -THM-NEG.INT)	/matadaan/	N/A	[matada:n]	「待とうとしない」
	cf. //mac-Ø// (待つ -NPST)	N/A	/maci/	[maci]	「待つ」
	//mac-i-i// (待つ -THM-SEQ)	N/A	N/A	[matci:]	「待って」

(9) 語幹末wに関する規則（詳しく4.1.3節を参照されたい）：

- ① w脱落規則：母音間のwが脱落する。
- ② w→u規則：語幹末のwがuに変わる。

表11 語幹末wに関する規則の具体例（動詞の例）

入力		w脱落	w→u	出力	
faw 「食べる」	a. //faw-a-n// (食べる -THM-NEG)	/faan/	N/A	[fa:n]	「食べない」
	b. //faw-Ø// (食べる -NPST)	N/A	/fau/	[fau]	「食べる」
	c. //faw-i// (食べる -IMP)	/fai/	N/A	[fai]	「食べろ」

(10) 母音削除規則：

母音始まりの接辞（接語の場合は対象外である）の接続で3母音連続が生じる場合、一つの母音が削除される（それが2番目なのか、3番目なのか、不明である）。

表12 母音削除の具体例（動詞語幹に継起接辞が接続する例）

入力		母音削除	出力	
mii「見る」	a. //mii-i// (見る -SEQ)	/mii/	[mi:]	「見て」
miirai「見られ」	b. //miirai-i// (見られる -SEQ)	/miirai/	[mi:rai]	「見られて」

(11) ゃ挿入規則：

/p, b, k, g/ 終わりの語幹が語末や阻害音始まりの接辞に直接後続される際、/p, b, k, g/ がコーダに立てないため、ゃが挿入される。

表13 ゃ挿入の具体例

	入力	ゃ挿入	出力
//asp//→/asip/ 「遊ぶ」	a. //asip-tar// (遊ぶ -PST)	/asipžtar/	[asipsta:] 「遊んだ」
	b. //asip-Ø// (遊ぶ -NPST)	/asipž/	[asipʃ] 「遊ぶ」
kak 「書く」	c. //kak-tar// (書く -PST)	/kakžtar/	[kakʃta:] 「書いた」
	d. //kak-Ø// (書く -NPST)	/kakž/	[kakʃ] 「書く」

2.3 語の分節

本節では、文を語の連続に切り分け、さらに語を形態素に分節する方針について解説する。なお、以下本稿全体にわたって、例文は4段で示す(12)。グロスの表記(12)はThe Leipzig Glossing Rules (LGR, Max Planck Institute 2015)⁶と「下地理則の研究室：方言グロスリスト」⁷に準拠する。

(12) 例文表記

- 1 段目： 表層形 (イタリック)
- 2 段目： 基底形
- 3 段目： グロス
- 4 段目： 日本語訳

(13) 表記のルール

- a. 拡張語 (いわゆる文節；下地2018：9) ごとにスペース。
- b. 形態素境界を - で区切る。
- c. 接語境界を = で区切る。
- d. 複合語は、複合要素を + で区切る。
- e. 文法カテゴリーのラベルを英字大文字で振る。

2.3.1 語, 接語, 接辞

本稿において、新城方言における語・接語・接辞という3つの単位を区別する。語と接語・接辞の違いは、単独で発話を構成できるかどうかである。語が単独で発話できるのに対し、接語・接辞は単独に発話をなさない。「あなた明日映画を見るの？」の質問に対する答えとして、語/mii-Ø/ (見る -NPST) (動詞語幹mii「見る」と非過去肯定屈折接辞-Øから

⁶ <https://www.eva.mpg.de/lingua/pdf/Glossing-Rules.pdf>

⁷ https://docs.google.com/spreadsheets/d/14wKM61WaLz34-Dcj3Q_vFUmrwqu5Do7VeQu-It8wZVU/edit#gid=267816193

3.1 屈折接辞

屈折接辞は語の完成において必須の接辞である。新城方言において、屈折カテゴリーは文末終止可能な動詞（定動詞）か不可能な動詞（副動詞）かで異なり、定動詞は極性、時制と法によって屈折するが、副動詞はこれらで屈折せず、きれつづきで屈折する（一部の副動詞は極性によっても屈折する）。以下、例を示す。

(16) 定動詞：

a. *mīin*

mii-n

見る -NEG.NPST

「見ない」

（極性による屈折）

b. *mīitaa*

mii-tar

見る -PST

「見た」

（時制による屈折）

c. *mīiru*

mii-ru

見る -IMP1

「見ろ」

（命令法による屈折）

(17) 副動詞：

d. *mīitti*

mii-tti

見る -SEQ2

「見て」

（極性によって屈折：肯定継起）

e. *mīidana*

mii-dana

見る -SEQ.NEG

「見ず」

（極性によって屈折：否定継起）

3.2 語幹とその内部構造

語幹は屈折接辞を除いた部分を指す。語幹は、その最小の要素として語幹核（用語は下地2018に倣う）からなる。語幹核は、(18)に見るように語根のみの場合もあるが、(19)のように複数の語根の組み合わせ（すなわち複合語幹）の場合もあり、さらに(20)のように別品詞の語根から派生された語幹の場合もある。以下、語幹を【 】, 語幹核をboldによって表示する。

(18) 単一語根からなる語幹核

a. *miin*

【mii】 -n
見る -NEG.NPST
「見ない」

b. *kakan*

【kak】 -a -n
書く -THM -NEG.NPST
「書かない」

(19) 複合語根からなる語幹核

a. *miipazimisimitaa*

【mii+pazmi】 -tar
見る + 始める -PST
「見始めさせた」

b. *faunupitaa*

【faw+nupi】 -tar
食べる + 除く -PST
「食べ物を一部のみ食べて、次回に食べるために、意図的に残しておいた」

(20) 他品詞の語根から派生された語幹からなる語幹核

a. *ssukarasitaa*

【ssu-kar】 -tar
白い -VLZ -PST
「白くした」

語幹核には、受動や使役といった派生接辞が後続する場合もある。

(21) 語幹核と派生接辞からなる派生語幹

(A) 語幹核と1つの派生接辞からなる

a. *miisimitaa*

【mii	-smi	-tar
見る	-CAUSI	-PST
「見させた」		

b. *miirariitaa*

【mii	-rari	-tar
見る	-PASS	-PST
「見られた」		

c. *miisamacitaa*

【mii	-samac	-tar
見る	-POL	-PST
「見なさった」		

(B) 語幹核と複数の派生接辞からなる

d. *miisimirarisamacitaa*

【mii	-smi	-ra(r)i	-samac	-tar
見る	-CAUSI	-PASS	-POL	-PST
「見させられなさった」				

3.3 連結母音

一部の動詞語幹が屈折する場合、語幹のままで屈折接辞のホストになることも、語幹と屈折接辞の間に母音 a, i が生じることもある。本稿において、これらを語幹と屈折接辞をつなぐ母音要素、すなわち連結母音 (thematic vowel) として見る。これは音韻環境で決まるような挿入母音と異なり、子音語幹と特定の屈折接辞をつなぐという機能を持った形態素である。以下、3.3.1 節に連結母音を認める理由について述べる。3.3.2 節にその出現と選択について記述する。

(22) a. <i>tuban</i> tub-a-n 飛ぶ-THM-NEG.NPST 「飛ばない」	cf. <i>miin</i> <i>ssuun</i> <i>kuun</i> mii-n ssuu-n kuu-n 見る-NEG.NPST する-NEG.NPST 来る-NEG.NPST 「見ない」 「しない」 「来ない」 <i>miiba</i> <i>siiba</i> <i>kisiba</i> mii-ba sii-ba kisi-ba 見る-CSL する-CSL 来る-CSL 「見るので」 「するので」 「来るので」
b. <i>tubiba</i> tub-i-ba 飛ぶ-THM-CSL 「飛ぶので」	

3.3.1 認める理由

新城方言における語幹と屈折接辞の間に生じる母音 a, i は母音 a, i についての分析案を比較していく。

(23) 母音 a, i についての分析案：

(A) 接辞の頭母音として見る

(A-1) 接辞の基底形に母音が含まれる分析

(A-2) 接辞の基底形に母音が含まれない分析

(B) 動詞語幹と接辞を接続するための独立した形態素（すなわち、連結母音）として見る

以下、tub 「飛ぶ」という語幹を例として挙げながら、分析案 (B) を選ぶ理由を述べていく。

(24) /tubadi/ 「飛ぼう」の形態構造の分析方法

a. 接辞の頭母音として b. 連結母音として

<i>tubadi</i>	<i>tubadi</i>
tub-a-di	tub-a-di
飛ぶ-INT	飛ぶ-THM-INT

(25) /tubiba/ 「飛ぶので」の形態構造の分析方法

a. 接辞の頭母音として b. 連結母音として

<i>tubiba</i>	<i>tubiba</i>
tub-i-ba	tub-i-ba
飛ぶ-CSL	飛ぶ-THM-CSL

まず、案 (A-2) を採用しない理由を先に述べる。案 (A-2) の分析において、a や i が挿入によるものとしてみている。ただ、なぜ別の母音でなく、a や i が挿入されるかが説明できないため、案 (A-2) をとらない。

次に、案 (A-1) と案 (B) の優劣を比較する際、2つの現象が関わっている。一番目は意志肯定を表す形である。意志を表す場合、/tubadi/ と、di が省略される形 /tuba/ の両形式が観察される。案 (A-1) をとると、なぜ頭母音のみ残され、接辞の一部である di が省略されたか、説明がつかない。

一方、案 (B) のように、a を連結母音として分析し、省略されるのは意志接辞-di であると分析すれば、この省略現象を問題なく説明できる。

(26) 意志肯定「飛ぼう」(Bの分析案に従う)

a.	<i>tub-a-di</i>	b.	<i>tub-a</i>
	tub-a-di		tub-a
	飛ぶ-THM-INT		飛ぶ-THM

二番目として、新城方言において、動詞に焦点が当たっている場合、継起接辞によって屈折された形に焦点助詞=du がつく形である。一方、焦点助詞がつかない場合、継起接辞の i と進行相を表すアスペクト動詞の頭母音 u のと融合が見られる。

案 (A-1) の分析に従い、継起接辞 //ii// が母音語幹に接続する場合、(27a) の形に対し、接辞頭の i が脱落されることで説明でき、(27b) に対して、継起接辞全体をとることで説明できる。しかし、子音語幹の場合、(27d) の形を得るために、なぜ全体でなく、半分の接辞が省略されるか、説明できなくなる。一方、案 (B) の分析をとると、母音語幹の場合も、子音語幹の場合も継起接辞-iをとるという一般化で説明できる。

(27) 母音語幹： 子音語幹 (案Bの分析に従う)

a.	<i>idiidu</i>	<i>urtaa.</i>	c.	<i>kakiidu</i>	<i>urtaa.</i>
	idi-i=du	ur-tar		kak-i-i=du	ur-tar
	出る-SEQ1=FOC	PROG-PST		書く-THM-SEQ1=FOC	PROG-PST
	「出ていた」			「書いていた」	
b.	<i>idiuutaa</i>		d.	<i>kakjuutaa</i>	
	idi+	ur-tar		kak-i+	ur-tar
	出る+	PROG-PST		書く-THM+	PROG-PST
	「出ていた」			「書いていた」	

上記に基づき、案 (B) の分析をとり、連結母音を認めることにする。

3.3.2 連結母音の出現と選択

新城方言において、a, i という 2 つの連結母音を認める。語幹のクラスと後続する接辞によって、連結母音の出現や選択が異なる。連結母音は、語幹クラスによって出現が決まり、クラス 2 の動詞語幹にのみ接続する。連結母音の選択は表14にまとめている。

表14 連結母音と屈折接辞 (クラス 2)

クラス 2 の語幹	連結母音	屈折接辞
kak 「書く」	a	直説法過去否定接辞-ttan, 直説法非過去否定接辞-n, 希求法意志肯定接辞-di, 希求法意志否定接辞-daan, 絶対否定-dana, 条件否定-dakara
	i	仮説条件接辞-ruba, 助言接辞-ba, 理由接辞-ba, 継起接辞-i, 例示接辞-ttija
	なし	上記以外

以下本稿において、連結母音 a をとる場合の語幹は a 連結語幹と、連結母音 i をとる場合の語幹は i 連結語幹と、連結母音をとらない語幹を非連結語幹と名付ける。

4 語幹クラス

本節において、まず、4.1 節では、派生接辞の接続なしに、1 つの動詞語根からなる語幹を扱い、4.2 節においては派生接辞の接続によって生じる派生語幹について述べる。

4.1 単一語根からなる語幹

このタイプの語幹は語幹末音素により、3 つのクラスに分類できる。クラス 1 の動詞語幹は語幹末の音素はすべて母音 i である。一方、クラス 2 の語幹は子音終わりのものであり、クラス 3 の語幹はいくつかの異形態を持ち、不規則な語幹交替が観察されている。

表15 単一動詞語幹種類とその例

クラス	語幹種類	例
クラス 1	i 語幹	mii 「見る」, nii 「煮る」, fii 「くれる」, ibi 「植える」.etc
クラス 2	p 語幹	asp 「遊ぶ」.etc
	b 語幹	jub 「呼ぶ」, tub 「飛ぶ」.etc
	k 語幹	kak 「書く」, ksk- 「聞く」, ik 「行く」, ažk 「歩く」.etc
	g 語幹	kug 「漕ぐ」, mmg 「握る」, kang 「担う」.etc
	f 語幹	cf 「作る」
	ff 語幹	ff 「降る」
	vv 語幹	vv 「売る」, nivv 「寝る」.etc
	s 語幹	nas 「産む」, panas 「話す」, kurus 「殺す」, pus 「干す」.etc
	ss 語幹	ss 「知る」 kiss 「切る」.etc
	c 語幹	mac 「待つ」, kac 「勝つ」, uc 「落ちる」.etc
	žž 語幹	žž 「いる」, ažž 「言う」, pažž 「入る」.etc
	m 語幹	jum 「読む」, jam 「痛む」, fum 「履む」, sizm 「沈む」.etc
	mm 語幹	mm 「膿む」, mm 「紡ぐ」.etc
	n 語幹	sn 「死ぬ」
	r 語幹	tur 「取る」, tuur 「通る」, par 「張る」, jabur 「破る」.etc
w 語幹	fa 「食べる」, umu 「思う」, juku 「休む」, bara 「笑う」.etc	
クラス 3		sii/(s)suu/as 「する」
		kuu/kisi/k 「来る」

以下、現時点において、観察される語幹の種類とその例を表15にする。クラス1は日本語共通語の「一段動詞」に該当し、全て母音iで終わる語幹である。クラス2のr語幹、c語幹とw語幹、さらに不規則な語幹形を持っているクラス3の語幹について特記すべき点があるため、4.1.1節から4.1.4節において記述していく。

4.1.1 クラス2のr語幹

r語幹の非連結語幹が子音始まりの接辞によって屈折する（例えば、tuur「通る」に直説法過去肯定接辞-tarが接続する）場合、/tuuž-tar/という語幹と接辞頭の間母音が介在しない形と/tuuri-tar/という母音iが介在する形が観察される。

まず、/tuuž-tar/という母音が介在しない形について、直説法過去肯定接辞-tarによって屈折する場合、他のクラス2の語幹（表16においてjum「読む」を例に）と同様、非連

結語幹rに-tarが後続すると、コーダに立つことになり、r→ž規則⁸が適用され、/tuužtar/の形として出力される。

(28) r→ž規則 (再掲) :

コーダに立つrがžに変わる (ただし、適用順序はr脱落B規則と代償延長規則より後である。)

表16 母音が介在しない形の出力過程

		入力	r→ž	出力
tuur 「通る」	-PST	//tuur-tar//	/tuužtaa/	[tu:žta:] 「通った」
cf. jum 「読む」	-PST	//jum-tar//	N/A	[jumta:] 「読んだ」

次に、母音iが介在する形について述べる。母音iが介在する形は他の語幹にない、r語幹に過去・肯定接辞-tar, 継起接辞-tti, 例示-ttjaが後続するときに限って観察される形であり、語幹末のrとt始まりの接辞の間の母音iがどう分析するかが問題になる。この特殊な形式が、言語接触によって生じるものなのか、今後の課題にする。

4.1.2 クラス2のc語幹

「待つ」や「勝つ」のような動詞は、c/tの語幹末子音交替が観察される。以下、「待つ」の例を挙げて説明する。

表17 c/t語幹 (mac「待つ」を例に)

c/t語幹	「待つ」	屈折例
非連結語幹	/mac/	/mac-Ø/ (待つ-NPST)「待つ」
a連結語幹	/mata/	/mat-a-n/ (待つ-THM-NEG.NPST)「待たない」
i連結語幹	/maci/	/mac-i-i/ (待つ-THM-SEQ1)「待って」

上記により、a連結母音をとるときに限って、「待つ」の語幹がmatに交替するため、c語幹を基語幹とし、2.2.4節に述べたようにc/t語幹末交替規則を立てる。ただし、この規則は動詞屈折論においてのみ適用される (cf. /aca/ [atsa]「明日」, micaaž/ [mitsa:ž]「3人」)。

⁸ r→ž規則が宮古祖語における*riがžになる (下地 2018) という通時的な変化を共時的な規則の形で解釈し直したものと、動機づけられる。

(29) 語幹末 c / t 交替規則 (動詞屈折論に限る；再掲)

c 終わりの語幹が連結母音 a を要求する屈折接辞に後続される際、c/t の語幹末交替が義務的に生じる。

4.1.3 クラス 2 の w 語幹

「食べる」に対応する動詞は fau 「食べる」、faan 「食べない」、fai 「食べる」などと屈折する。これを表層形に従って形態素分析すれば、fa-u, fa-a-n, fa-i というふうになり、語幹が /fa/ と分析されることができるように見える。しかし、fau 「食べる」の語形について、語幹 /fa/ から導く時に、これまで設定してきた a, i に加えて、新たに u という連結母音を、この語形のためだけに設定する必要がある点において、劣っている。本稿ではこれを基底で //faw// としてみる。すなわち、w 終わりの子音語幹動詞と見る。その理由は、これがクラス 2 の子音語幹 (表15) と全く同じ形態論的振る舞いをするからである。すなわち、連結母音を取り、クラス 2 の屈折接辞を要求する (例：命令形が i)。//faw// 以外にも、//umuw// 「思う」や //aw// 「喧嘩する」なども w 語幹であると見る。w 語幹には、以下の形態音韻規則が適用される。

(30) 語幹末 w に関する規則 (再掲)：

- ① w 脱落規則：母音間の w が脱落する。
- ② w → u 規則：語幹末の w が u に変わる。

w 語幹に関する分析の問題点は、/w/ が表層に一切生じないという点である。しかし、この点は通時的にも共時的にも正当化可能である。まず、w 脱落規則は、新城方言における一般的な音素配列上の制限、すなわち母音間の /w/ の回避 (*awa など) によって動機づけられる。これは母音間の *w が脱落したという通時的な変化を共時的な規則の形で解釈し直したものである。次に、語幹末の w が u に交替する規則について述べる。w と u が高・後舌・円唇という調音的性質において類似し、語幹末の w が u に変化すると想定する。以下、faw 「食べる」における具体的な屈折過程は表18に示す。

表18 faw 「食べる」の語幹形

faw 「食べる」	入力	w 脱落	w → u	出力
a 連結語幹	//faw-a//	/faa/	N/A	/faa/ [fa:]
i 連結語幹	//faw-i//	/fai	N/A	/fai/ [fai]
非連結語幹	//faw//	N/A	/fau/	/fau/ [fau]

4.1.4 クラス3の語幹

クラス3の動詞は(すなわち、「する」と「来る」)は、とる接辞によって、語幹形式が交替する。クラス3の語幹は、以下の2点において、別のクラスと異なる特殊な振る舞いを見せている。まず、1点目として、屈折接辞によって、形態音韻論によって導かない、不規則な語幹交替が起こることである。日本語の「する」に対応する動詞は、現時点で、ssuu, sii, asといった3つの語幹形が観察される。形態音韻規則によって、1つの形式から他の2形式に導くことができない。「来る」の語幹(k, kuu, kisi)も同様である。

さらに、2点目は接辞によってどのような語形をとるかについて、クラス3の語幹は、他のクラスの語幹とは綺麗に対応していない(表19)ことにある。例えば、(31)に示すように、命令法によって屈折する際、クラス3の語幹はクラス1の命令接辞-ruも、クラス2の命令接辞-iもとらず、語幹ssuu, kuuそのままの形で命令を表す⁹。

表19 「する」, 「来る」の語幹 (cf.クラス2のs語幹とk語幹)

	クラス3 「する」	cf.クラス2 kurus「殺す」	クラス3 「来る」	cf.クラス2 kak「書く」
非連結語幹に該当する形	sii, ssuu	kurus	k, kuu	kak
クラス2のa連結語幹に該当する形	ssuu	kurus-a	kuu	kak-a
クラス2のi連結語幹に該当する形	sii	kurus-i	kisi	kak-i
複合動詞の前部語幹	as	kurus	/	kak

(31) 命令法による屈折：

a. *ssuu.*

ssuu

する .IMP

「しろ！」

b. *kumankai* *kuu.*

kuma=nkai kuu.

ここ =ALL 来る .IMP

「ここに来て。」

⁹ 「する」の命令形は、/ssuu/のほか、/sii-ru/の形もある(5.2.3.1節を参照されたい)。

4.2 派生語幹

3.2節で前述した語幹核に、さらに1つ以上の派生接辞（現時点において、派生接辞 -smi/-as, 受身・可能接辞 -rari, 尊敬接辞 -samacが確認されている）が付くことによって、派生語幹を形成できる。以下、現時点に観察される派生語幹を挙げる。複数の派生接辞が同時に要求される際、(32)の順に並んでいる。

(32) 語幹核 (-使役接辞) (-受身・可能接辞) (-尊敬接辞) 派生語幹

(33) 語幹核と使役接辞からなる派生語幹：

a. *miisimitaa*

【mii	-smi】	-tar
見る	-CAUSI	-PST
「見させた」		

語幹核と受身・可能接辞からなる派生語幹：

b. *miirariitaa*

【mii	-rari】	-tar
見る	-PASS	-PST
「見られた」		

語幹核と尊敬接辞からなる派生語幹：

c. *miisamacitaa*

【mii	-samac】	-tar
見る	-POL	-PST
「見なさせた」		

語幹核、使役接辞と受身・可能接辞からなる派生語幹：

d. *miisimiritaa*

【mii	-smi	-rari】	-tar
見る	-CAUSI	-PASS	-PST
「見させられた」			

語幹、使役接辞と尊敬接辞からなる派生語幹：

e. *miisimisamacitaa*

【mii	-smi	-samac】	-tar
見る	-CAUSI	-POL	-PST
「見させなさせた」			

語幹，受身・可能接辞と尊敬接辞からなる派生語幹：

f. *miisimisamacitaa*

【mii -rari -samac】 -tar

見る -PASS -POL -PST

「見られなさった」

語幹，使役接辞，受身・可能接辞と尊敬接辞からなる派生語幹：

g. *miisimirarisamacitaa*

【mii -smi -ra(r)i -samac】 -tar

見る -CAUSI -PASS -POL -PST

「見させられなさった」

ここに特記すべきなのは，新城方言における使役接辞である。使役接辞は，-smi/-asという2つが存在し，これらのどちらを使うかは語幹クラスによって決まる。クラス1，クラス2，クラス3の「する」sii，クラス3の「来る」kuuは-smiをとり，クラス2，クラス3の「来る」kisiは-asをとる。

(34) -smi :

a. *ibisimiru*

ibi-smi-ru

植える CAUSI-IMP1

「植えさせろ」 (クラス1)

b. *kakasimiru*

kak-a-smi-ru

書く -THM-CAUSI-IMP1

「書かせろ」 (クラス2)

c. *siisimiru*

sii-smi-ru

する -CAUSI-IMP1

「させろ」 (クラス3 「する」)

d. *kuusimiru*

kuu-smi-ru

来る -CAUSI-IMP1

「来させろ」 (クラス3 「来る」)

(35)

-as :

a. *kakasi*

kak-as-i

書く -CAUS2-IMP2

「書かせる」

(クラス 2)

b. *kisjaasi*

kisi-as-i

来る -CAUS2-IMP2

「来させる」

(クラス 3 「来る」)

5 屈折パラダイムと屈折接辞

本節は屈折を扱う。まず、5.1節で屈折パラダイムをまとめてから、5.2節において、屈折接辞について述べながら、各語幹の屈折過程を示す。

5.1 屈折パラダイム

本稿において、動詞を、文末終止できる「定動詞」と、そうでない「副動詞」に分ける。2種類の動詞は屈折において、異なる振る舞いをする。定動詞は極性、時制、法という3つのカテゴリーのいずれか、あるいは全てによって屈折する一方、副動詞はこの3つのカテゴリーによって屈折せず、節の接続関係（きれつづき）を屈折カテゴリーとする。以下の表において、便宜上、非連結語幹をBで、a連結語幹をE-aで、i連結語幹をE-iで表す。次節から、各屈折接辞について述べながら、それぞれの屈折過程を示していく。

表20 屈折パラダイム

クラス		1	2	3	
例		「見る」	「書く」	「する」	「来る」
非連結語幹 (B _{basic})		mii	kak	sii, ssuu	k, kuu
連結語幹 (E _{xpend-a} , E _{xpend-i})			kak-a, kak-i	sii, ssuu	kuu, kisi
定動詞					
直説法：					
直説法非過去肯定	B	mii-Ø	kak-Ø	sii-Ø	k-Ø
直説法非過去否定	E-a	mii-n	kak-a-n	ssuu-n	kuu-n
直説法過去肯定	B	mii-tar	kak-tar	sii-tar	k-tar
直説法過去否定	E-a	mii-ttan	kak-a-ttan	ssuu-ttan	kuu-ttan
希求法：					
意志肯定	E-a	mii-di	kak-a-di	ssuu-di	kuu-di
意志否定	E-a	mii-daan	kak-a-daan	ssuu-daan	kuu-daan
命令法：					
命令	B	mii-ru	kak-i	sii-ru/ssuu	kuu
禁止	B	mii-na	kak-na	sii-na	k-na
副動詞					
同時	B	mii-ccjaan/ mii-gacnjaan	kak-ccjaan/ kak-gacnjaan	sii-ccjaan/ sii-gacnjaan	k-ccjaan/ k-gacnjaan
仮説・条件	B	mii-kka	kak-kka	sii-kka	k-kka
	E-i	mii-ruba	kak-i-ruba	sii-ruba	kisi-ruba
助言・理由	E-i	mii-ba	kak-i-ba	sii-ba	kisi-ba
継起	E-i	mii-i	kak-i-i	sii-i	kisi-i
	B	mii-tti	kak-tti	sii-tti	kisi-tti
例示	E-i	mii-ttja	kak-i-ttja	sii-ttja	kisi-ttja
目的	B	mii-ga	kak-ga	sii-ga	k-ga
絶対否定	E-a	mii-dana	kak-a-dana	ssuu-dana	kuu-dana
条件否定	E-a	mii-dakara	kak-a-dakara	ssuu-dakara	kuu-dakara

5.2 屈折接辞

3.1節に前述したように、屈折接辞は動詞構成の必須要素であり、語末に義務的に現れる。以下、屈折接辞のリストを表21にまとめる。

表21 屈折接辞（空欄は「該当する形がない」という意味を表す）

動詞	極性		肯定		否定
	法				
定動詞	直説法	過去	-tar		-ttan
		非過去	-∅		-n
	希求法	意志	-di		-daan
	命令法	命令	-ru	-i	-na（禁止）
副動詞		同時	-ccjaan	-gacnjaan	
		仮説・条件	-kka	-ruba	-dakara（条件否定）
		助言・理由	-ba		
		継起	-i	-tti	-dana（絶対否定）
		例示	-ttja		
		目的	-ga		

5.2.1 定動詞：直説法

この種の屈折接辞は文末終止にも連体節にも現れる。以下、順に記述していく。

5.2.1.1 直説法過去肯定「～た」接辞

直説法過去肯定接辞 -tar が連結母音を要求せず、非連結語幹に接続する。この接辞は文末終止の環境において、r 脱落規則(36)と代償延長規則(37)が順に適用され、[ta:]として発音する。

(36) r 脱落規則（随意的；再掲）：

以下の A, B の異なる環境において、r が脱落する。

環境 A（随意的） r → ∅ / V_i

環境 B（義務的） 過去・肯定接辞 -tar が語末に立つとき、もしくは存在動詞とコピュラ動詞語幹（ur 「いる」、ar 「ある」と (j)ar 「である」、詳しくは 6 節を参照）に一部の接辞が後続するとき、末尾の r が脱落する。その後、以下に述べる代償延長規則が適用される。

(37) 代償延長規則（再掲）：

形態音韻規則による脱落や融合によって、モーラ数が減る場合、元のモーラ数を守るために、代償延長規則が適用される。

表22 直説法過去肯定接辞 -tar に対する形態音韻規則の適用

	入力	r脱落	代償延長	出力
接辞-tar (-PST)	//tar//	/ta/	/taa/	[ta:]

この接辞はクラス3の語幹に接続する場合、「する」ならsiiに、「来る」ならkに接続する。さらに、一部のクラス2の語幹と共に起する場合、いくつかの形態音韻規則が適用される。以下、それぞれの屈折過程を示す（表23）。

表23 肯定直説法過去「～た」による屈折

形態音韻規則が不要な語幹				
クラス	入力			出力
1	//mii-tar//			[mi:ta:] 「見た」
2	vv 語幹 //vv-tar//			[v:ta:] 「売った」
	zz 語幹 //ažž-tar//			[až:ta:] 「言った」
	m 語幹 //jam-tar//			[jamta:] 「痛んだ」
	mm 語幹 //mm-tar//			[m:ta:] 「膿んだ」
	n 語幹 //sn-tar// (/sin-tar/)			[sinta:] 「死んだ」
3	//sii-tar//			[si:ta:] 「した」
ž挿入規則のみが必要な語幹				
	入力	ž挿入		出力
2	p 語幹 //asp-tar// (/asip-tar/)	/asipžtar/		[asipšta:] 「遊んだ」
	b 語幹 //jub-tar//	/jubžtar/		[jubžta:] 「呼んだ」
	k 語幹 //kak-tar//	/kakžtar/		[kakšta:] 「書いた」
	g 語幹 //kug-tar//	/kugžtar/		[kugžta:] 「漕いだ」
3	//k-tar//	/kžtar/		[kšta:] 「来た」
i挿入規則のみが必要な語幹				
2	f 語幹 //cf-tar// (/cif-tar/)	/cifitar/		[cifita:~cifota:] 「作った」
	s 語幹 //kurus-tar//	/kurusitar/		[kurusita:] 「殺した」
	c/t 語幹 //kac-tar//	/kacitar/		[kacita:] 「勝った」
r→ž規則のみが必要な語幹				
	入力	r→ž		出力
2	r 語幹 //tur-tar//	/tužtar/		[tužta:] 「取った」
i挿入規則とi拡張規則が必要な語幹				
	入力	i挿入	i拡張	出力
2	ff 語幹 //ff-tar//	/ffitār/	/fiitar/	[fi:ta:~fv:ta:] 「降った」
	ss 語幹 //ss-tar//	/ssitar/	/siitar/	[si:ta:] 「知った」
w→u規則のみが必要な語幹				
	入力	w→u		出力
2	w 語幹 //faw-tar//	/fautar/		[fauta:] 「食べた」

5.2.1.2 直説法過去「～しなかった」

否定直説法過去接辞 -ttanがクラス2の語幹に後続する際、連結母音 aを要求し、a連結語幹に接続する。c/t語幹と共に起する場合、c/t語幹交替が生じる。クラス3の語幹に接続する場合、「する」なら ssuuに、「来る」なら kuuに接続する。

表24 否定直説法過去 -ttanによる屈折

形態音韻規則が不要な語幹			
クラス	入力	出力	
1	//mii-ttan//	[mi:ttan]	「見なかった」
	p語幹 //asp-a-ttan// (/asip-a-ttan/)	[asipattan]	「遊ばなかった」
	b語幹 //jub-a-ttan//	[jubattan]	「呼ばなかった」
	k語幹 //kak-a-ttan//	[kakattan]	「書かなかった」
	g語幹 //kug-a-ttan//	[kugattan]	「漕がなかった」
	f語幹 //cf-a-ttan// (/cif-a-ttan/)	[cifattan]	「作らなかった」
	ff語幹 //ff-a-ttan//	[ffattan]	「降らなかった」
2	vv語幹 //vv-a-ttan//	[vvattan]	「売らなかった」
	s語幹 //kurus-a-ttan//	[kurusattan]	「殺さなかった」
	ss語幹 //ss-a-ttan//	[ssattan]	「知らなかった」
	ʒʒ語幹 //ʒʒ-a-ttan//	[ʒʒattan]	「要らなかった」
	m語幹 //jam-a-ttan//	[jamattan]	「痛まなかった」
	mm語幹 //mm-a-ttan//	[mmattan]	「膿まなかった」
	n語幹 //sn-a-ttan// (/sin-a-ttan/)	[sinattan]	「死ななかった」
	r語幹 //tur-a-ttan//	[turattan]	「取らなかった」
3	//ssuu-ttan//	[ssu:ttan]	「しなかった」
	//kuu-ttan//	[ku:ttan]	「来なかった」
c/t交替規則のみ必要な語幹			
	入力	c/t交替	出力
2	c/t語幹 //kac-a-ttan//	/katattan/	[katattan] 「勝たなかった」
w脱落規則のみ必要な語幹			
	入力	w脱落	出力
2	w語幹 //faw-a-ttan//	/faan/	[fa:ttan] 「食べなかった」

5.2.1.3 非過去肯定「～る」

直説法非過去肯定接辞-Øが連結母音を要求せず、非連結語幹に接続する。クラス3の場合、「する」ならsiiに、「来る」ならkに接続する。さらに、一部のクラス2の語幹と共に起する場合、いくつかの形態音韻規則が適用される。以下、屈折過程を示す。

表25 直説法非過去肯定-Ø「～る」の屈折

形態音韻規則が不要な語幹 ¹⁰			
クラス	入力		出力
1	//mii-Ø//		[mi:] 「見る」
	vV 語幹 //vV-Ø//		[v:] 「売る」
	zZ 語幹 //zZ-Ø//		[z:] 「要る」
2	m 語幹 //jam-Ø//		[jam] 「痛む」
	mm 語幹 //mm-Ø//		[m:] 「膿む」
	n 語幹 //sn-Ø//// (/sin-Ø/)		[sin] 「死ぬ」
3	//sii-Ø//		[si:] 「する」
z挿入規則のみが必要な語幹			
	入力	z挿入	出力
	p 語幹 //asp-Ø// (/asip-Ø/)	/asipz/	[asipʂ] 「遊ぶ」
2	b 語幹 //jub-Ø//	/jubz/	[jubʂ] 「呼ぶ」
	k 語幹 //kak-Ø//	/kakz/	[kakʂ] 「書く」
	g 語幹 //kug-Ø//	/kugz/	[kugʂ] 「漕ぐ」
3	//k-Ø//	/kz/	[kʂ] ¹¹ 「来る」
i挿入規則のみが必要な語幹			
	入力	i挿入	出力
	f 語幹 //cf-Ø//// (/cif-Ø/)	/cifi/	[cifi] 「作る」
2	s 語幹 //kurus-Ø//	/kurusi/	[kurusi] 「殺す」
	c/t 語幹 //kac-Ø//	/kaci/	[kaci] 「勝つ」

¹⁰ 「形態音韻規則が不要な語幹」の動詞は入力（基底形）に語尾がなく、そのまま出力語幹だけで構成される動詞」でなく、語幹に非過去肯定接辞-Øの接続したあと、語幹と接辞の間の音挿入や語幹の交替などの規則の適用が不要であると分析している。

¹¹ 投稿者の聴覚印象によって、直説非過去//k-Ø//→z挿入→/kz/[kʂ]の場合、最小語制約に満たしていない1モーラで実現している。最小語制約により[kʂ]が[s:]に伸ばすのではないかと予測しているが、少なくとも今の話者はそうにならなかったようである。今後、別の話者にも確認するが、現時点において、例外として、そのままに記述することにする。

r→ž規則のみ必要な語幹						
	入力	r→ž		出力		
2	r 語幹	//tur-Ø//	/tuž/	[tuž]	「取る」	
i挿入規則とi拡張規則が必要な語幹						
	入力	i挿入	i拡張	出力		
2	ff 語幹	//ff-Ø//	/ffi/	/fii/	[fi:~fvi:]	「降る」
	ss 語幹	//ss-Ø//	/ssi/	/sii/	[si:]	「知る」
w→u規則のみが必要な語幹						
	入力	w→u		出力		
2	w 語幹	//faw-Ø//	/fau/	[fau]	「食べる」	

5.2.1.4 非過去否定「～しない」

直説法非過去否定接辞 -nがクラス2の語幹に後続する際、連結母音aを要求し、a連結語幹に接続する。c/t語幹と共起する場合、c/t語幹交替が生じる。クラス3の語幹に接続する場合、「する」ならssuuに、「来る」ならkuuに接続する。さらに、一部のクラス2の語幹と共起する場合、いくつかの形態音韻規則が適用される。以下、それぞれの屈折過程を示す。

表26 否定直説法非過去-nによる屈折

形態音韻規則が不要な語幹					
クラス	入力	出力			
1	//mii-n//	[mi:n]	「見ない」		
2	p 語幹 //asp-a-n// (/asip-a-n/)	[asipan]	「遊ばない」		
	b 語幹 //jub-a-n//	[juban]	「呼ばない」		
	k 語幹 //kak-a-n//	[kakan]	「書かない」		
	g 語幹 //kug-a-n//	[kugan]	「漕がない」		
	f 語幹 //cf-a-n// (/cif-a-n/)	[cifan]	「作らない」		
	ff 語幹 //ff-a-n//	[ffan]	「降らない」		
	vv 語幹 //vv-a-n//	[vvan]	「売らない」		
	s 語幹 //kurus-a-n//	[kurusan]	「殺さない」		
	ss 語幹 //ss-a-n//	[ssan]	「知らない」		
	zz 語幹 //žž-a-n//	[žžan]	「要らない」		
	m 語幹 //jam-a-n//	[jaman]	「痛まない」		
	mm 語幹 //mm-a-n//	[mman]	「膿まない」		

2	n 語幹	//sn-a-n// (/sin-a-n/)		[sinan]	「死なない」
	r 語幹	//tur-a-n//		[turan]	「取らない」
3		//ssuu-n//		[ssu:N]	「しない」
		//kuu-n//		[ku:N]	「来ない」
c/t 交替規則のみ必要な語幹					
	入力		c/t 交替	出力	
2	c/t 語幹	//kac-a-n//	/katan/	[katan]	「勝たない」
w 脱落規則のみ必要な語幹					
	入力		w 脱落	出力	
2	w 語幹	//faw-a-n//	/faan/	[fa:N]	「食べない」

5.2.2 定動詞：希求法

この種の屈折接辞は文末終止にのみ現れる屈折接辞を指す。以下それぞれ述べる。

5.2.2.1 希求法意志肯定「～しよう」

希求法意志肯定を表す接辞は -di である。-di は、(38) 示すように、「～しよう」という意志としても、「～しよう」という勧誘の意味として用いられる。

- (38) a. *baga sibaiju miidi.*
ba=ga sibai=u mii-di
1SG=NOM 芝居=ACC 見る -INT
「私が芝居を見よう。」
- b. *vvaa sibaiju miidina?*
vva=a sibai=u mii-di=na
2SG=TOP 芝居=ACC 見る -INT=Q.SFP
「あなたは（私と一緒に）芝居を見ないか？」

次に、クラス 2 の語幹に後続する際、連結母音 a を要求し、a 連結語幹に接続するが、クラス 3 の語幹に接続する場合、「する」なら ssuu に、「来る」なら kuu に接続する。以下、それぞれの屈折過程を示す。

表27 希求法意志肯定-diによる屈折

形態音韻規則が不要な語幹				
クラス	入力		出力	
1	//mii-di//		[mi:di]	「見よう」
	p 語幹 //asp-a-di// (/asip-a-di/)		[asipadi]	「遊ぼう」
	b 語幹 //jub-a-di//		[jubadi]	「呼ぼう」
	k 語幹 //kak-a-di//		[kakadi]	「書こう」
	g 語幹 //kug-a-di//		[kugadi]	「漕ごう」
	f 語幹 //cf-a-di// (/cif-a-di/)		[cifadi]	「作ろう」
	ff 語幹 //ff-a-di//		[ffadi]	「降ろう」
2	vv 語幹 //vv-a-di//		[vvadi]	「売ろう」
	s 語幹 //kurus-a-di//		[kurusadi]	「殺そう」
	ss 語幹 //ss-a-di//		[ssadi]	「知ろう」
	ʒʒ 語幹 //ʒʒ-a-di//		[ʒʒadi]	「要ろう」
	m 語幹 //jam-a-di//		[jamadi]	「痛もう」
	mm 語幹 //mm-a-di//		[mmadi]	「膿もう」
	n 語幹 //sn-a-di// (sin-a-di/)		[sinadi]	「死のう」
	r 語幹 //tur-a-di//		[turadi]	「取ろう」
3	//ssuu-di//		[ssu:di]	「しよう」
	//kuu-di//		[ku:di]	「来よう」
c/t 交替規則のみ必要な語幹				
	入力	c/t 交替	出力	
2	c/t 語幹 //kac-a-di//	/katadi/	[katadi]	「勝とう」
w 脱落規則のみ必要な語幹				
	入力	w 脱落	出力	
2	w 語幹 //faw-a-di//	/faadi/	[fa:di]	「食べよう」

5.2.2.2 希求法意志否定「～しない(つもりだ)」

希求法意志否定接辞 -daan が 1 人称とよく共起し、「～しない(つもりだ)」意味を表す。クラス 2 の語幹に後続する際、連結母音 a を要求し、a 連結語幹に接続する。c/t 語幹と共起する場合、c/t 語幹交替が生じる。クラス 3 の語幹に接続する場合、「する」なら ssuu に、「来る」なら kuu に接続する。さらに、一部のクラス 2 の語幹と共起する場合、いくつかの形態音韻規則が適用される。以下、それぞれの屈折過程を示す。

表28 希求法意志否定-daanによる屈折

形態音韻規則が不要な語幹			
クラス	入力	出力	
1	//mii-daan//	[mi:da:n]	「見ない」
p 語幹	//asp-a-daan// (/asip-a-daan/)	[asipada:n]	「遊ばない」
b 語幹	//jub-a-daan//	[jubada:n]	「呼ばない」
k 語幹	//kak-a-daan//	[kakada:n]	「書かない」
g 語幹	//kug-a-daan//	[kugada:n]	「漕がない」
f 語幹	//cf-a-daan// (/cif-a-daan/)	[cifada:n]	「作らない」
ff 語幹	//ff-a-daan//	[ffada:n]	「降らない」
2	//vv-a-daan//	[vvada:n]	「売らない」
s 語幹	//kurus-a-daan//	[kurusada:n]	「殺さない」
ss 語幹	//ss-a-daan//	[ssada:n]	「知らない」
zz 語幹	//žž-a-daan//	[žžada:n]	「要らない」
m 語幹	//jam-a-daan//	[jamada:n]	「痛まない」
mm 語幹	//mm-a-daan//	[mmada:n]	「濃まない」
n 語幹	//sn-a-daan// (/sin-a-daan/)	[sinada:n]	「死なない」
r 語幹	//tur-a-daan//	[turada:n]	「取らない」
3	//ssuu-daan//	[ssu:da:n]	「しない」
	//kuu-daan/	[ku:da:n]	「来ない」
c/t 交替規則のみ必要な語幹			
	入力	c/t 交替	出力
2	c/t 語幹 //kac-a-daan//	/katadaan/	[katada:n] 「勝たない」
w 脱落規則のみ必要な語幹			
	入力	w 脱落	出力
2	w 語幹 //faw-a-daan//	/faadaan/	[fa:da:n] 「食べない」

5.2.3 定動詞：命令法

5.2.3.1 命令法命令「～しろ」

新城方言における命令法命令接辞には、-ru/i という2つが存在するが、共起する語幹によって選択される。クラス1の動詞語幹には-ruがつき、クラス2の動詞語幹には-iがつく（その際、連結母音を要求せず、非連結語幹に接続する）。クラス3の動詞語幹の場合、「する」には、(a) 命令接辞-ruの接続によるsii-ru形と、(b) ssuu形があり、「来る」の場合はkuuという形をとり、命令接辞とは共起しない。以下、それぞれの屈折過程を示す。

表29 命令法命令-ruと-iによる屈折

命令接辞-ruをとる語幹			
クラス	入力	出力	
1	//mii-ru//	[mi:ru]	「見ろ」
3	//sii-ru//	[si:ru]	「しろ」
命令接辞-iをとる語幹			
形態音韻規則が不要な語幹			
p 語幹	//asp-i// (/asip-i/)	[asipi]	「遊べ」
b 語幹	//jub-i//	[jubi]	「呼べ」
k 語幹	//kak-i//	[kaki]	「書け」
g 語幹	//kug-i//	[kugi]	「漕げ」
f 語幹	//cf-i// (/cif-i/)	[cifi]	「作れ」
ff 語幹	//ff-i//	[ffi]	「降れ」
vv 語幹	//vv-i//	[vvi]	「売れ」
s 語幹	//kurus-i//	[kurusu]	「殺せ」
2 ss 語幹	//ss-i//	[ssi]	「知れ」
c/t 語幹	//kac-i//	[kaci]	「勝て」
zz 語幹	//ažž-i//	[ažži]	「言え」
m 語幹	//jum-i//	[jumi]	「読め」
mm 語幹	//mm-i//	[mmi]	「濃め」
n 語幹	//sn-i// (/sin-i/)	[sini]	「死ね」
r 語幹	//tur-i//	[turi]	「取れ」
w 脱落規則のみ必要な語幹			
	入力	w 脱落	出力
2 w 語幹	//faw-i//	/fai/	[fai] 「食べろ」
特殊な語形をとる語幹			
3	//ssuu//	[ssu:]	「しろ」
	//kuu//	[ku:]	「来よ」

5.2.3.2 命令法禁止「～するな」

命令法禁止接辞 -na が連結母音を要求せず、非連結語幹に接続する。ただ、一部のクラス 2 の語幹と共起する場合、いくつかの形態音韻規則が適用される。クラス 3 の語幹に接続する場合、「する」なら sii に、「来る」なら k に接続する。

表30 命令法禁止-na「～するな」による屈折

形態音韻規則が不要な語幹				
クラス	入力	出力		
1	//mii-na//	[mi:na]	「見るな」	
	v _v 語幹 //vv-na//	[v:na]	「売るな」	
	žž 語幹 //ažž-na//	[až:na]	「言うな」	
2	m 語幹 //jam-na//	[jamna]	「痛むな」	
	mm 語幹 //mm-na//	[m:na]	「膿むな」	
	n 語幹 //sn-na// (/sin-na/)	[sinna]	「死ぬな」	
3	//sii-na//	[si:na]	「するな」	
ž挿入規則のみ必要な語幹				
	入力	ž挿入	出力	
	p 語幹 //asp-na// (/asip-na/)	/asipžna/	[asipšna]	「遊ぶな」
2	b 語幹 //jub-na//	/jubžna/	[jubžna]	「呼ぶな」
	k 語幹 //kak-na//	/kakžna/	[kakšna]	「書くな」
	g 語幹 //kug-na//	/kugžna/	[kugžna]	「漕ぐな」
3	//k-na//	/kžna/	[kšna]	「来るな」
i挿入規則のみ必要な語幹				
	入力	i挿入	出力	
	f 語幹 //cf-na// (/cif-na/)	/cifina/	[cifina]	「作るな」
2	s 語幹 //kurus-na//	/kurusina/	[kurusina]	「殺すな」
	c/t 語幹 //kac-na//	/kacina/	[kacina]	「勝つな」
r→ž規則のみが必要な語幹				
	入力	r→ž	出力	
2	r 語幹 //tur-na//	/tuž/	[tužna]	「取るな」
i挿入規則とi拡張規則が必要な語幹				
	入力	i挿入	i拡張	出力
2	ff 語幹 //ff-na//	/ffina/	/fiina/	[fi:na~fv:na] 「降るな」
	ss 語幹 //ss-na//	/ssina/	/siina/	[si:na] 「知るな」
w→u規則のみが必要な語幹				
	入力	w→u	出力	
2	w 語幹 //faw-na//	/fauna/	[fauna]	「食べるな」

5.2.4 副動詞

副動詞は文末終止できず、副詞節にのみ現れる。副動詞は以下の屈折接辞によって屈折する。

5.2.4.1 同時「～しながら」

同時を表す接辞には -ccjaan と -gacnjaan がある。両者は、意味においても、語幹接続においても類似し、現時点において、両者がどう使い分けるか、不明である。

まず、話者によると、両者とも「～しながら（～をする）」の意味を表し、入れ替えて使用することができる。

(39) a.	<i>baga</i>	<i>jarabipadanu</i>	<i>kutuu</i>	<i>umuidasiccjaandu</i>
	ba=ga	jarabi+pada=nu	kutu=u	umuidas-ccjaan=du
	1SG=GEN	子供+時代=GEN	こと=ACC	思い出す-SIM1=FOC
	<i>panasii</i>	<i>miidi.</i>		
	panas-i-i	mii-di		
	話す-THM-SEQ1	みる-INT		

b.	<i>baga</i>	<i>jarabipadanu</i>	<i>kutuu</i>	<i>umuidasigacinjaandu</i>
	ba=ga	jarabi+pada=nu	kutu=u	umuidas-gacnjaan=du
	1SG=GEN	子供+時代=GEN	こと=ACC	思い出す-SIM2=FOC
	<i>panasii</i>	<i>miidi.</i>		
	panas-i-i	mii-di		
	話す-THM-SEQ1	みる-INT		

「我が子供時代のことを思い出しながら話してみるね。」

(40) a.	<i>ancinu</i>	<i>munuu</i>	<i>miiccjaan,</i>
	anci=nu	munuu	mii-ccjaan
	あんな=GEN	もの=ACC	見る-SIM1
	<i>hoterunkai</i>	<i>ikžtti,</i>	<i>butuu</i>
	hoteru=nkai	ik-tti	butu=u
	ホテル-ALL	行く-SEQ2	夫-ACC
			<i>ažžtaa.</i>
			ažž-tar
			言う-PST

- b. *ancinu* *munuu* *miigac̣njaan,*
anci=nu *munuu* *mii-gac̣njaan*
 あんな=GEN もの=ACC 見る-SIM2
hoterunkai *ikžtti,* *butuu* *ažžtaa.*
hoteru=nkai *ik-tti* *butu=u* *ažž-tar*
 ホテル-ALL 行く-SEQ2 夫-ACC 言う-PST
 「あんなものを見ながら、ホテルに行き、夫を叱った。」

次に、語幹との接続について、両者ともクラス2の語幹に後続する際、連結母音を要求せず、非連結語幹に接続する。クラス3の語幹に接続する場合、「する」なら *sii* に、「来る」なら *k* に接続する（表31）。さらに、一部のクラス2の語幹と共起する場合、いくつかの形態音韻規則が適用される。それぞれの屈折過程を表32、表33に示す。

表31 同時接辞-*ccjaan*と-*gac̣njaan*が付く語幹

同時を表す接辞	- <i>ccjaan</i>	- <i>gac̣njaan</i>
クラス1	非連結語幹	非連結語幹
クラス2	非連結語幹	非連結語幹
クラス3	「する」	<i>sii</i>
	「来る」	<i>k</i>

表32 同時-ccjaan「～しながら」による屈折

形態音韻規則が不要な語幹				
クラス	入力	出力		
1	//mii-ccjaan//	[mi:ccja:N] 「見ながら」		
	vV 語幹 //vV-ccjaan//	[v:ccja:N] 「売りながら」		
	zZ 語幹 //ažž-ccjaan//	[až:ccja:N] 「言いながら」		
2	m 語幹 //jam-ccjaan//	[jamccja:N] 「痛みながら」		
	mm 語幹 //mm-ccjaan//	[m:ccja:N] 「膿みながら」		
	n 語幹 //sn-ccjaan// (/sin-ccjaan/)	[sinccja:N] 「死にながら」		
3	//sii-ccjaan//	[si:ccja:N] 「しながら」		
ž挿入規則のみが必要な語幹				
	入力	ž挿入	出力	
	p 語幹 //asp-ccjaan// (/asip-ccjaan/)	/asipžccjaan/	[asipšccja:N] 「遊びながら」	
2	b 語幹 //jub-ccjaan//	/jubžccjaan/	[jubžccja:N] 「呼びながら」	
	k 語幹 //kak-ccjaan//	/kakžccjaan/	[kakšccja:N] 「書きながら」	
	g 語幹 //kug-ccjaan//	/kugžccjaan/	[kugžccja:N] 「漕ぎながら」	
3	//k-ccjaan//	/kžccjaan/	[kšccja:N] 「来ながら」	
i挿入規則のみが必要な語幹				
	入力	i挿入	出力	
	f 語幹 //cf-ccjaan// (/cif-ccjaan/)	/cificcjaan/	[cificcja:N] 「作りながら」	
2	s 語幹 //kurus-ccjaan//	/kurusiccjaan/	[kurusiccja:N] 「殺しながら」	
	c/t 語幹 //kac-ccjaan//	/kaciccjaan/	[kaciccja:N] 「勝ちながら」	
r→ž規則のみが必要な語幹				
	入力	r→ž	出力	
2	r 語幹 //tur-ccjaan//	/tužccjaan/	[tužccja:N] 「取りながら」	
i挿入規則とi拡張規則が必要な語幹				
	入力	i挿入	i拡張	出力
2	ff 語幹 //ff-ccjaan//	/fficcjaan/	/fiiccjaan/	[fi:ccja:N~fv:ccja:N] 「降りながら」
	ss 語幹 //ss-ccjaan//	/ssiccjaan/	/siiccjaan/	[si:ccja:N] 「知りながら」
w→u規則のみが必要な語幹				
	入力	w→u	出力	
2	w 語幹 //faw-ccjaan//	/fauccjaan/	[fauccja:N] 「食べながら」	

表33 同時-gacnjaan「～しながら」による屈折

形態音韻規則が不要な語幹					
クラス	入力		出力		
1	//mii-gacnjaan//		[mi:gacinja:N] 「見ながら」		
	vV 語幹	//vv-gacnjaan//	[v:gacinja:N] 「売りながら」		
	zZ 語幹	//ažž-gacnjaan//	[až:gacinja:N] 「言いながら」		
2	m 語幹	//jam-gacnjaan//	[jamgacinja:N] 「痛みながら」		
	mm 語幹	//mm-gacnjaan//	[m:gacinja:N] 「膿みながら」		
	n 語幹	//sn-gacnjaan//// (/sin-gacnjaan/)	[singacinja:N] 「死にながら」		
3	//sii-gacnjaan//		[si:gacinja:N] 「しながら」		
ž挿入規則のみが必要な語幹					
	入力		ž挿入	出力	
	p 語幹	//asp-gacnjaan// (/asip-gacnjaan/)	/asipžgacnjaan/	[asipšgacinja:N] 「遊びながら」	
2	b 語幹	//jub-gacnjaan//	/jubžgacnjaan/	[jubžgacinja:N] 「呼びながら」	
	k 語幹	//kak-gacnjaan//	/kakžgacnjaan/	[kakšgacinja:N] 「書きながら」	
	g 語幹	//kug-gacnjaan//	/kugžgacnjaan/	[kugžgacinja:N] 「漕ぎながら」	
3	//k-gacnjaan//		/kžgacnjaan/	[kšgacinja:N] 「来ながら」	
i挿入規則のみが必要な語幹					
	入力		i挿入	出力	
	f 語幹	//cf-gacnjaan//// (/cif-gacnjaan/)	/cifigacnjaan/	[cifigacinja:N] 「作りながら」	
2	s 語幹	//kurus-gacnjaan//	/kurusigacnjaan/	[kurusigacinja:N] 「殺しながら」	
	c/t 語幹	//kac-gacnjaan//	/kacigacnjaan/	[kacigacinja:N] 「勝ちながら」	
r→ž規則のみが必要な語幹					
	入力		r→ž	出力	
2	r 語幹	//tur-gacnjaan//	/tužgacnjaan/	[tužgacinja:N] 「取りながら」	
i挿入規則とi拡張規則が必要な語幹					
	入力		i挿入	i拡張	出力
2	ff 語幹	//ff-gacnjaan//	/ffigacnjaan/	/fiigacnjaan/	[fi:gacinja:N~ fu:gacinja:N] 「降りながら」
	ss 語幹	//ss-gacnjaan//	/ssigacnjaan/	/siigacnjaan/	[si:gacinja:N] 「知りながら」
w→u規則のみが必要な語幹					
	入力		w→u	出力	
2	w 語幹	//faw-gacnjaan//	/faugacnjaan/	[faugacinja:N] 「食べながら」	

5.2.4.2 仮説条件「～したら、～すれば」

仮説条件を表す接辞には -kka, -ruba があり, 意味上の区別は不明である

- (41) a. *umakara* *miikka* *agatagamaimai* *miiraripazi.*
 uma=kara mii-kka agata=gami=mai mii-rari-Ø=paz
 そこ=ABL 見る -CND1 遠く =LIM=ADT 見る -POT-NPST=LCTN
- b. *umakara* *miiruba* *agatagamaimai* *miiraripazi.*
 uma=kara mii-ruba agata=gami=mai mii-rari-Ø=paz
 そこ=ABL 見る -CND2 遠く =LIM=ADT 見る -POT-NPST=LCTN
- 「そこから見れば, 遠く見られるはず。」

- (42) a. *sibaiju* *miikka* *narasii* *firu.*
 sibai=u mii-kka naras-i-i fii-ru
 芝居=ACC 見る -CND1 教える -THM-SEQ1 くれる -IMP
- b. *sibaiju* *miiruba* *narasii* *firu.*
 sibai=u mii-ruba naras-i-i fii-ru
 芝居=ACC 見る -CND2 教える -THM-SEQ1 くれる -IMP
- 「芝居を見たら, 教えてくれ。」

- (43) a. *tarooja* *sinsiju* *miikka* *icimai*
 taroo=a sinsii=u mii-kka icmai
 太郎=TOP 先生=ACC 見る -CND1 いつも
pingi.
 pingi-Ø.
 逃げる -NPST
- b. *tarooja* *sinsiju* *miiruba* *icimai*
 taroo=a sinsii=u mii-ruba icmai
 太郎=TOP 先生=ACC 見る -CND2 いつも
pingi.
 pingi-Ø.
 逃げる -NPST
- 「太郎は先生を見るたびに, いつも逃げる。」

両者は語幹への接続によって異なる。-kkaはクラス2の語幹に後続する際、連結母音を要求せず、非連結語幹に接続する。クラス3の語幹に接続する場合、「する」ならsiiに、「来る」ならkに接続する。一方、-rubaはクラス2の語幹に後続する際、i連結母音を要求し、i連結語幹に接続する。クラス3の語幹に接続する場合、「する」ならsiiに、「来る」ならkisiに接続する。-kkaと-rubaの接続による屈折過程を表35と表36に示す。

表34 仮説条件接辞-kkaと-rubaが付く語幹

仮説条件を表す接辞		-kka	-ruba
クラス1		非連結語幹	非連結語幹
クラス2		非連結語幹	i連結語幹
クラス3	「する」	sii	sii
	「来る」	k	kisi

表35 仮説条件-kka「～したら、～すれば」による屈折

形態音韻規則が不要な語幹				
クラス	入力		出力	
1	//mii-kka//		[mi:kka]	「見たら」
	v _v 語幹	//v _v -kka//	[v:kka]	「売ったら」
	z _z 語幹	//ažž-kka//	[až:kka]	「言ったら」
2	m 語幹	//jam-kka//	[jamkka]	「傷んだら」
	mm 語幹	//mm-kka//	[m:kka]	「膿んだら」
	n 語幹	//sn-kka// (/sin-kka/)	[sinkka]	「死んだら」
3	//sii-kka//		[si:kka]	「したら」
ž挿入規則のみ必要な語幹				
	入力	i挿入	出力	
	p 語幹	//asp-kka// (/asip-kka/)	/asipžkka/	[asipškka] 「遊んだら」
2	b 語幹	//jub-kka//	/jubžkka/	[jubžkka] 「読んだら」
	k 語幹	//kak-kka//	/kakžkka/	[kakškka] 「書いたら」
	g 語幹	//kug-kka//	/kugžkka/	[kugžkka] 「漕いだら」
3	//k-kka//		/kžkka/	[kškka] 「来たら」
i挿入規則のみ必要な語幹				
	入力	i挿入	出力	
	f 語幹	//cf-kka// (/cif-kka/)	/cifikka/	[cifikka] 「作ったら」
2	s 語幹	//kurus-kka//	/kurusikka/	[kurusikka] 「殺したら」
	c/t 語幹	//kac-kka//	/kacikka/	[kacikka] 「勝ったら」
r→ž規則のみが必要な語幹				
	入力	r→ž	出力	
2	r 語幹	//tur-kka//	/tužkka/	[tužkka] 「取ったら」
i挿入規則とi拡張規則が必要な語幹				
	入力	i挿入	i拡張	出力
2	ff 語幹	//ff-kka//	/ffikka/ /fiikka/	[fi:kka~fo:kka] 「降ったら」
	ss 語幹	//ss-kka//	/ssikka/ /siikka/	[si:kka] 「知ったら」
w→u規則のみが必要な語幹				
	入力	w→u	出力	
2	w 語幹	//faw-kka//	/faukka/	[faukka] 「食べたら」

表36 仮説条件-ruba「～したら, ～すれば」による屈折

形態音韻規則が不要な語幹				
クラス	入力		出力	
1	//mii-ruba//		[mi:ruba]	「見たら」
	p 語幹 //asp-i-ruba// (/asip-iruba/)		[asipiruba]	「遊んだら」
	b 語幹 //jub-i-ruba//		[jubiruba]	「呼んだら」
	k 語幹 //kak-i-ruba//		[kagiruba]	「書いたら」
	g 語幹 //kug-i-ruba//		[kugiruba]	「漕いだら」
	f 語幹 //cf-i-ruba// (/cif-iruba/)		[cifiruba]	「作ったら」
	ff 語幹 //ff-i-ruba//		[ffiruba]	「降ったら」
	vv 語幹 //vv-i-ruba//		[vviruba]	「売ったら」
2	s 語幹 //kurus-i-ruba//		[kurusiruba]	「殺したら」
	ss 語幹 //ss-i-ruba//		[ssiruba]	「知ったら」
	c/t 語幹 //kac-i-ruba//		[kaciruba]	「勝ったら」
	zz 語幹 //ažž-i-ruba//		[ažžiruba]	「言ったら」
	m 語幹 //jam-i-ruba//		[jamiruba]	「痛んだら」
	mm 語幹 //mm-i-ruba//		[mmiruba]	「膿んだら」
	n 語幹 //sn-i-ruba// (/sin-iruba/)		[siniruba]	「死んだら」
	r 語幹 //tur-i-ruba//		[turiruba]	「取ったら」
3	//sii-ruba//		[si:ruba]	「したら」
	//kisi-ruba//		[kisiruba]	「来たら」
w脱落規則のみ必要な語幹				
	入力	w脱落	出力	
2	w 語幹 //faw-i-ruba//	/fairuba/	[fairuba]	「食べたら」

5.2.4.3 助言・理由「～した方がいい」と理由「～するので」

-baは助言「～した方がいい」の意味を表す(44)ことも、理由「～するので」の意味を表す(45)こともできる。

(44) a.	<i>jakii</i>	<i>faibadu</i>	<i>zaukaa.</i>
	<i>jak-i-i</i>	<i>faw-i-ba=du</i>	<i>zau-kar-Ø</i>
	焼く -THM-SEQ1	食べる -THM-PRP=FOC	いい -VLZ-NPST
	「焼いて食べた方がいい。」(助言)		

(45) a.	<i>aminu</i>	<i>ffibadu</i>	<i>sanau</i>	<i>mucii</i>	<i>piri.</i>
	<i>ami=nu</i>	<i>ff-i-ba=du</i>	<i>sana=u</i>	<i>muc-i-i</i>	<i>pir-i</i>
	雨=NOM	降る -THM-CSL=FOC	傘=ACC	持つ -THM-SEQ1	去る -IMP
	「雨が降るので、傘を持っていけ。」(理由)				

クラス2の語幹に後続する際、非連結母音を要求し、i連結語幹に接続する。クラス3の語幹に接続する場合、「する」ならsiiに、「来る」ならkisiに接続する。屈折は表38に参照されたい。

表37 助言・理由接辞-baが付く語幹

助言・理由を表す接辞		-ba
クラス1		非連結語幹
クラス2		i連結語幹
クラス3	「する」	sii
	「来る」	kisi

表38 助言・理由-baによる屈折

形態音韻規則が不要な語幹				
クラス	入力		出力	
1	//mii-ba//		[mi:ba]	「見るので」
	p 語幹 //asp-i-ba// (/asip-ba/)		[asipiba]	「遊ぶので」
	b 語幹 //jub-i-ba //		[jubiba]	「呼ぶので」
	k 語幹 //kak-i-ba//		[kakiba]	「書くので」
	g 語幹 //kug-i-ba//		[kugiba]	「漕ぐので」
	f 語幹 //cf-i-ba// (/cif-ba/)		[cifiba]	「作るので」
	ff 語幹 //ff-i-ba//		[ffiba]	「降るので」
	vv 語幹 //vv-i-ba//		[vviba]	「売るので」
2	s 語幹 //kurus-i-ba//		[kurusiba]	「殺すので」
	ss 語幹 //ss-i-ba//		[ssiba]	「知るので」
	c/t 語幹 //kac-i-ba//		[kaciba]	「勝つので」
	zz 語幹 //aʒz-i-ba//		[aʒziba]	「言うので」
	m 語幹 //jam-i-ba//		[jamiba]	「痛むので」
	mm 語幹 //mm-i-ba//		[mmiba]	「膿むので」
	n 語幹 //sn-i-ba// (/sin-ba/)		[siniba]	「死ぬので」
	r 語幹 //tur-i-ba//		[turiba]	「取るので」
3	//sii-ba/		[si:ba]	「するので」
	//kisi-ba//		[kisiba]	「来るので」
w脱落規則のみ必要な語幹				
	入力	w脱落	出力	
2	w 語幹 //faw-i-ba//	/faiba/	[faiba]	「食べるので」

5.2.4.4 継起「～て」

継起「～て」を表す接辞には*-i*と*-tti*がある。両者は意味と、語幹への接続の2点によって、区別できる。まず、意味について、以下に示すように、*-i*は「継起」(～してから)の意味(46)も、「方式」(～することで)の意味(47)も表せるのに対し、*-tti*は「方式」の意味として用いられない。

(46) a.	<i>imkai</i>	<i>ikii,</i>	<i>žžuu</i>	<i>tužtaa</i>
	im=nkai	ik-i-i	žžu=u	tur-tar
	海=ALL	行く -THM-SEQ1	魚=ACC	取る -PST
b.	<i>imkai</i>	<i>ikžtti</i>	<i>žžuu</i>	<i>tužtaa</i>
	im=nkai	ik-tti	žžu=u	tur-tar
	海=ALL	行く -SEQ2	魚=ACC	取る -PST

「海に行って (から), 魚を取った。」(継起)

(47) a.	<i>žžuu</i>	<i>jakii</i>	<i>fai.</i>
	žžu=u	jak-i-i	faw-i
	魚=ACC	焼く -THM-SEQ1	食べる -IMP
b.	<i>žžuu</i>	<i>*jakžtti</i>	<i>fai.</i>
	žžu=u	jak-tti	faw-i
	魚=ACC	焼く -SEQ2	食べる -IMP

(「魚はどうやって食べた方がいいの?」に対して)「魚を焼いて食べろ。」(方式)

相違点の2点目として、クラス2の語幹への接続にある。*-i*はクラス2の*i*連結語幹に接続するのに対し、*-tti*はクラス2の非連結語幹に接続する。

表39 継起接辞が付く語幹

継起を表す接辞		-i	-tti
クラス1		非連結語幹	非連結語幹
クラス2		<i>i</i> 連結語幹	非連結語幹
クラス3	「する」	sii	sii
	「来る」	kisi	kisi

以下，-iと-ttiの接続による屈折過程を示す。

表40 継起-i「～して」による屈折

母音削除規則のみ必要な語幹					
クラス	入力	母音削除		出力	
1	//mii-i//	/mii/		[mi:]	「見て」
3	//sii-i/	/sii/		[si:]	「して」
形態音韻規則が不要な語幹					
	p 語幹	//asp-i-i// (/asip-i-i/)		[asipi:]	「遊んで」
	b 語幹	//jub-i-i//		[jubi:]	「呼んで」
	k 語幹	//kak-i-i//		[kaki:]	「書いて」
	g 語幹	//kug-i-i//		[kugi:]	「漕いで」
	f 語幹	//cf-i-i// (/cif-i-i/)		[cifi:]	「作って」
	ff 語幹	//ff-i-i//		[ffi:]	「降って」
	vv 語幹	//vv-i-i//		[vvi:]	「売って」
2	ss 語幹	//ss-i-i//		[ssi:]	「知って」
	s 語幹	//kurus-i-i//		[kurusi:]	「殺して」
	c/t 語幹	//kac-i-i//		[kaci:]	「勝って」
	zz 語幹	//ažž-i-i//		[ažži:]	「言って」
	m 語幹	//jam-i-i//		[jami:]	「痛んで」
	mm 語幹	//mm-i-i//		[mmi:]	「膿んで」
	n 語幹	//sn-i-i// ((/sin-i-i/)		[sini:]	「死んで」
	r 語幹	//tur-i-i//		[turi:]	「取って」
3		//kisi-i//		[kisi:]	「来て」
w脱落規則と母音削除規則必要な語幹					
		入力	w脱落	母音削除	出力
2	w 語幹	//faw-i-i//	/faii/	/fai/	[fai] 「食べて」

表41 継起-tti「～して」による屈折

形態音韻規則が不要な語幹				
クラス	入力	出力		
1	//mii-tti//	[mi:tti]	「見て」	
	vv 語幹 //vv-tti//	[v:tti]	「売って」	
	ʒʒ 語幹 //aʒʒ-tti//	[aʒ:tti]	「言って」	
2	m 語幹 //jam-tti//	[jamtti]	「痛んで」	
	mm 語幹 //mm-tti//	[m:tti]	「膿んで」	
	n 語幹 //sn-tti//// (/sin-tti/)	[sintti]	「死んで」	
3	//sii-tti//	[si:tti]	「して」	
	//kisi-tti//	[kisitti]	「来て」	
ʒ挿入規則のみが必要な語幹				
	入力	ʒ挿入	出力	
	p 語幹 //asp-tti// (/asip-tti/)	/asipʒtti/	[asipʒtti]	「遊んで」
2	b 語幹 //jub-tti//	/jubʒtti/	[jubʒtti]	「呼んで」
	k 語幹 //kak-tti//	/kakʒtti/	[kakʒtti]	「書いて」
	g 語幹 //kug-tti//	/kugʒtti/	[kugʒtti]	「漕いで」
i挿入規則のみが必要な語幹				
	入力	i挿入	出力	
	f 語幹 //cf-tti//// (/cif-tti/)	/cifitti/	[cifitti]	「作って」
2	s 語幹 //kurus-tti//	/kurusitti/	[kurusitti]	「殺して」
	c/t 語幹 //kac-tti//	/kacitti/	[kacitti]	「勝って」
i挿入規則のみが必要な語幹				
	入力	i挿入	出力	
r→ʒ規則のみが必要な語幹				
	入力	r→ʒ	出力	
2	r 語幹 //tur-tti//	/tuʒtti/	[tuʒtti]	「取って」
i挿入規則とi拡張規則が必要な語幹				
	入力	i挿入	i拡張	出力
2	ff 語幹 //ff-tti//	/ffitti/	/fiitti/	[fi:tti~fv:tti] 「降って」
	ss 語幹 //ss-tti//	/ssitti/	/siitti/	[si:tti] 「知った」
w→u規則のみが必要な語幹				
	入力	w→u	出力	
2	w 語幹 //faw-tti//	/fautti/	[fautti]	「食べた」

5.2.4.5 例示「～したり」

-ttjaは例示を表す接辞である。

- (48) a. *hunnu* *jumittja,* *aaguu* *ažžii*
 hun=u *jum-i-ttja* *aagu=u* *ažž-i-i*
 本=ACC 読む-THM-EXP 歌=ACC 言う-THM-SEQ1
 asipž.
 asp-∅
 遊ぶ-NPST

(「休みの日に何をするのに?」に対して)「本を読んだり、歌を歌ったりして遊ぶ。」

この接辞はクラス2の語幹に後続する際、i連結母音を要求し、i連結語幹に接続する。クラス3の語幹に接続する場合、「する」ならsiiに、「来る」ならkisiに接続する。屈折過程は表43に示す。

表42 例示接辞-ttjaが付く語幹

例示を表す接辞	-ttja	
クラス1	非連結語幹	
クラス2	i連結語幹	
クラス3	「する」	sii
	「来る」	kisi

表43 例示-ttja「～たり」による屈折

形態音韻規則が不要な語幹				
クラス	入力	出力		
1	//mii-ttja//	[mi:ttja]	「見たり」	
	p 語幹 //asp-i-ttja// (/asip-ttja/)	[asipittja]	「遊んだり」	
	b 語幹 //jub-i-ttja//	[jubittja]	「呼んだり」	
	k 語幹 //kak-i-ttja//	[kakittja]	「書いたり」	
	g 語幹 //kug-i-ttja//	[kugittja]	「漕いだり」	
	f 語幹 //cf-i-ttja// (/cif-ttja/)	[cifittja]	「作ったり」	
	ff 語幹 //ff-i-ttja//	[ffittja]	「降ったり」	
	vv 語幹 //vv-i-ttja//	[vvittja]	「売ったり」	
2	s 語幹 //kurus-i-ttja//	[kurusittja]	「殺したり」	
	ss 語幹 //ss-i-ttja//	[ssittja]	「知ったり」	
	c/t 語幹 //kac-i-ttja//	[kacittja]	「勝ったり」	
	zz 語幹 //ažž-i-ttja//	[ažžittja]	「言ったり」	
	m 語幹 //jam-i-ttja//	[jamittja]	「痛んだり」	
	mm 語幹 //mm-i-ttja//	[mmittja]	「膿んだり」	
	n 語幹 //sn-i-ttja// (/sin-ttja/)	[sinttja]	「死んだり」	
	r 語幹 //tur-i-ttja//	[turittja]	「取ったり」	
3	//sii-ttja//	[si:ttja]	「したり」	
	//kisi-ttja//	[kisittja]	「来たり」	
w脱落規則のみが必要な語幹				
	入力	w脱落	出力	
2	w 語幹 //faw-i-ttja//	/faiittja/	[faiittja]	「食べたり」

5.2.4.6 目的「～しに」

目的接辞-gaは「～しに」の意味を表し、後ろにはよくik「行く」、pir「去る」と「来る」が立つ。

- (49) a. *munuu* *kauga* *ikžtaa.*
 munu=u *kaw-ga* *ik-tar*
 もの=ACC 買う-PURP 行く-PST
 「ものを買って行った。」
- b. *munuu* *kauga* *pižtaa.*
 munu=u *kaw-ga* *pir-tar*
 もの=ACC 買う-PURP 去る-PST
 「ものを買って立ち去った。」
- c. *munuu* *kauga* *kžtaa.*
 munu=u *kaw-ga* *k-tar*
 もの=ACC 買う-PURP 来る-PST
 「ものを買って来た。」

クラス2の語幹に後続する際、連結母音を要求しない。クラス3の語幹に接続する場合、「する」ならsiiに、「来る」ならkに接続する。以下、表44で-gaがどんな語幹に後続するかをまとめ、表45において屈折過程を示す。

表44 目的接辞-gaが付く語幹

目的を表す接辞	-ga	
クラス1	非連結語幹	
クラス2	非連結語幹	
クラス3	「する」	sii
	「来る」	k

表45 目的-ga「～しに」の屈折

形態音韻規則が不要な語幹						
クラス	入力		出力			
1	//mii-ga//		[mi:ga]	「見に」		
2	v _v 語幹	//vv-ga//	[v:ga]	「売りに」		
	žz 語幹	//ažž-ga//	[až:ga]	「言いに」		
	m 語幹	//jum-ga//	[jumga]	「読みに」		
2	mm 語幹	//mm-ga//	[m:ga]	「膿みに」		
	n 語幹	//sn-ga// (/sin-ga/)	[singa]	「死にに」		
3	//sii-ga//		[si:ga]	「しに」		
ž 挿入規則のみが必要な語幹						
	入力		ž 挿入	出力		
2	p 語幹	//asp-ga//// (/asip-ga/)	/asipžga/	[asipšga]	「遊びに」	
	b 語幹	//jub-ga//	/jubžga/	[jubžga]	「呼びに」	
	k 語幹	//kak-ga//	/kakžga/	[kakšga]	「書きに」	
	g 語幹	//kug-ga//	/kugžga/	[kugžga]	「漕ぎに」	
3	//k-ga//		/kžga/	[kšga]	「来に」	
i 挿入規則のみが必要な語幹						
	入力		i 挿入	出力		
2	f 語幹	//cf-ga// (/cif-ga/)	/cifiga/	[cifiga]	「作りに」	
	s 語幹	//kurus-ga//	/kurusiga/	[kurusiga]	「殺しに」	
	c/t 語幹	//kac-ga//	/kaciiga/	[kaciiga]	「勝ちに」	
r → ž 規則のみが必要な語幹						
	入力		r → ž	出力		
2	r 語幹	//tur-ga//	/tužga/	[tužga]	「取りに」	
i 挿入規則と i 拡張規則が必要な語幹						
	入力		i 挿入	i 拡張	出力	
2	ff 語幹	//ff-ga//	/ffiga/	/fiiga/	[fi:ga-fv:ga]	「降りに」
	ss 語幹	//ss-ga//	/ssiga/	/siiga/	[si:ga]	「知りに」
w → u 規則のみが必要な語幹						
	入力		w → u	出力		
2	w 語幹	//faw-ga//	/fauga/	[fauga]	「食べに」	

5.2.4.7 絶対否定「～せず」

接辞-danaは副動詞の絶対否定を表す。その直後に、よく道具格=siiが立つ。

(50) <i>tukurubancjuu</i> tukurubanci=u 住所=ACC <i>njaan.</i> njaa-Ø ない-NPST 「住所を書かずに、手紙を出してしまった。」	<i>kakadana (sii)</i> kak-a-dana (=sii) 書く -THM-NEG.SEQ (=INST)	<i>tigamjuu</i> <i>idasi</i> tigami=u idas-i 手紙=ACC 出す-THM
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------

絶対否定接辞-danaはクラス2の語幹に後続する際、a連結母音を要求し、i連結語幹に接続する。クラス3の語幹に接続する場合、「する」ならssuuに、「来る」ならkuuに接続する。

表46 絶対否定接辞が付く語幹

絶対否定を表す接辞		-dana
クラス1		非連結語幹
クラス2		a連結語幹
クラス3	「する」	ssuu
	「来る」	kuu

さらに、一部のクラス2の語幹と共起する場合、いくつかの形態音韻規則が適用される。以下、屈折過程を示す。

表47 絶対否定-dana「～せず」による屈折

形態音韻規則が不要な語幹				
クラス	入力		出力	
1	//mii-dana//		[mi:dana]	「見ずに」
	p 語幹 //asp-a-dana// (/asip-a-dana/)		[asipadana]	「遊ばずに」
	b 語幹 //jub-a-dana//		[jubadana]	「呼ばずに」
	k 語幹 //kak-a-dana//		[kakadana]	「書かず」
	g 語幹 //kug-a-dana//		[kugadana]	「漕がずに」
	f 語幹 //cf-a-dana// (/cif-a-dana/)		[cifadana]	「作らずに」
	ff 語幹 //ff-a-dana//		[ffadana]	「降らずに」
	vv 語幹 //vv-a-dana//		[vvadana]	「売らずに」
2	s 語幹 //kurus-a-dana//		[kurusadana]	「殺さずに」
	ss 語幹 //ss-a-dana//		[ssadana]	「知らずに」
	zz 語幹 //žž-a-dana//		[žžadana]	「要らずに」
	m 語幹 //jam-a-dana//		[jamadana]	「痛まずに」
	mm 語幹 //mm-a-dana//		[mmadana]	「膿まずに」
	n 語幹 //sn-a-dana// (/sin-a-dana/)		[sinadana]	「死なずに」
	r 語幹 //tur-a-dana//		[turadana]	「取らずに」
	//ssuu-dana//		[ssu:dana]	「せずに」
3	//kuu-dana//		[ku:dana]	「来ずに」
c/t 交替規則のみ必要な語幹				
	入力	c/t 交替	出力	
2	c/t 語幹 //kac-a-dana//	/katadana/	[katadana]	「勝たずに」
w 脱落規則のみ必要な語幹				
	入力	w 脱落	出力	
2	w 語幹 //faw-a-dana//	/faadana/	[fa:dana]	「食べずに」

5.2.4.8 条件否定「～しなかったら、～しないなら」

条件否定接辞には-dakaraがある。

- (51) *vvaga* *faadakara* *taugaran* *fii-ru*.
 vva=ga *faw-a-dakara* *tau-gara=n* *fii-ru*
 2SG=NOM 食べる -THM-NEG.CND 誰 -INF=DAT あげる -IMP
 「あなたが食べないなら、誰かにあげろ。」

また、クラス2の語幹に後続する際、a連結母音を要求し、a連結語幹に接続する。クラス3の語幹に接続する場合、「する」ならssuuに、「来る」ならkuuに接続する。

表48 条件否定接辞が付く語幹

条件否定を表す接辞	-dakara	
クラス1	非連結語幹	
クラス2	a連結語幹	
クラス3	「する」	ssuu
	「来る」	kuu

さらに、一部のクラス2の語幹と共起する場合、いくつかの形態音韻規則が適用される。以下、屈折過程を示す。

表49 条件否定-dakara「～しなかったら、～しないなら」による屈折

形態音韻規則が不要な語幹				
クラス	入力		出力	
1	//mii-dakara//		[mi:dakara]	「見ずに」
	p 語幹 //asp-a-dakara// (/asip-a-dakara/)		[asipadakara]	「遊ばずに」
	b 語幹 //jub-a-dakara//		[jubadakara]	「呼ばずに」
	k 語幹 //kak-a-dakara//		[kakadakara]	「書かずに」
	g 語幹 //kug-a-dakara//		[kugadakara]	「漕がずに」
	f 語幹 //cf-a-dakara// (/cif-a-dakara/)		[cifadakara]	「作らずに」
	ff 語幹 //ff-a-dakara//		[ffadakara]	「降らずに」
2	vv 語幹 //vv-a-dakara//		[vvdakara]	「売らずに」
	s 語幹 //kurus-a-dakara//		[kurusadakara]	「殺さずに」
	ss 語幹 //ss-a-dakara//		[ssadakara]	「知らずに」
	zz 語幹 //žž-a-dakara//		[žžadakara]	「要らずに」
	m 語幹 //jam-a-dakara//		[jamadakara]	「痛まずに」
	mm 語幹 //mm-a-dakara//		[mmdakara]	「膿まずに」
	n 語幹 //sn-a-dakara// (/sin-a-dakara/)		[sinadakara]	「死なずに」
	r 語幹 //tur-a-dakara//		[turadakara]	「取らずに」
3	//ssuu-dakara//		[ssu:dakara]	「せずに」
	//kuu-dakara//		[ku:dakara]	「来ずに」
c/t 交替規則のみ必要な語幹				
	入力	c/t 交替	出力	
2	c/t 語幹 //kac-a-dakara//	/katadakara/	[katadakara]	「勝たずに」
w 脱落規則のみ必要な語幹				
	入力	w 脱落	出力	
2	w 語幹 //faw-a-dakara//	/faadakara/	[fa:dakara]	「食べずに」

6 存在動詞とコピュラ動詞

存在動詞とコピュラ動詞は同じ語彙的資源 (*ar) を共有し、表50に示すように、r 語幹における形態音韻規則の適用において、他の動詞と大別できるため、まとめて記述する。

表50 ur, ar とそれ以外の r 語幹動詞における違う形態音韻規則の適用

	入力	r脱落	代償延長	r→ž	出力
ur 「いる」	a. //ur-tar//	/uta/	/uutaa/	N/A	[u:ta:] 「いた」
ar 「ある」	b. //ar-tar//	/ata/	/aataa/	N/A	[a:ta:] 「あった」
cf. tur 「取る」	c. //tur-tar//	N/A	N/A	/tužtaa/	[tužta:] 「取った」

6.1 存在動詞

存在動詞とは、動詞述語句に生じ、生物やものの存在を表す動詞のことをいう。主語の有生性に反応する点において、コピュラ動詞と異なる。

肯定の場合、有生物の場合にはur「いる」を、無生物の場合にはar「ある」を使う；否定の場合、有生物の場合にはur-a-n（いる-THM-NEG.NPST）を、無生物の場合にはnjaa-n（ない-NEG.NPST）という形を取る。

52) a.	<i>kumanna</i> kuma=n=na ここ=DAT=TOP 「ここには猫がいる。」	<i>majunudu</i> maju=nu=du 猫=NOM=FOC	<i>uu.</i> ur-Ø. いる-NPST (有生物・肯定)
b.	<i>kanu jaanna</i> kanu jaa=n=na あの 家=DAT=TOP 「あの家には大きな窓がある。」	<i>madunu</i> madu=nu 窓=NOM	<i>aa.</i> ar-Ø ある-NPST (無生物・肯定)
c.	<i>kumanna</i> kuma=n=na ここ=DAT=TOP 「ここには猫がない。」	<i>majunudu</i> maju=nu=du 猫=NOM=FOC	<i>uran.</i> ur-a-n. いる-THM-NEG.NPST (有生物・否定)
d.	<i>kumanna</i> kuma=n=na ここ=DAT=TOP 「ここにお金がない。」	<i>zinnudu</i> zin=nu=du お金=NOM=FOC	<i>njaan.</i> njaa-n. ない-NEG.NPST (無生物・否定)

存在動詞の屈折を表51にまとめる。存在動詞は、連結母音をとる点でクラス2の語幹に似ている。存在動詞のうち、njaa「ない」は否定の場合（具体的に言うと、定動詞の直説法過去否定と直説法非過去否定、副動詞の絶対否定と条件否定）に限って屈折する。ar「ある」は希求法と命令法によっては屈折しない。

表51 存在動詞の屈折パラダイム（空欄は「該当する形がない」という意味を表す）

クラス		1	2	存在動詞		
例		「見る」	「書く」	「いる」	「ある」	「ない」
非連結語幹 (B _{asic})		mii	kak	ur	ar	njaa
連結語幹 (E _{xpend} -a, E _{xpend} -i)			kak-a,	ur-a	ar-a	
			kak-i	ur-i	ar-i	
定動詞						
直説法：						
直説法過去肯定	B	mii-tar	kak-tar	ur-tar	ar-tar	
直説法過去否定	E-a	mii-ttan	kak-a-ttan	ur-a-ttan		njaa-ttan
直説法非過去肯定	B	mii-Ø	kak-Ø	ur-Ø	ar-Ø	
直説法非過去否定	E-a	mii-n	kak-a-n	ur-a-n		njaa-n
希求法：						
意志肯定	E-a	mii-di	kak-a-di,	ur-a-di		
意志否定	E-a	mii-daan	kak-a-daan	ur-a-daan	ar-a-daan	
命令法：						
命令	B	mii-ru	kak-i	ur-i		
禁止	B	mii-na	kak-na	ur-na		
副動詞						
同時	B	mii-ccjaan/	kak-ccjaan/	ur-ccjaan/	ar-ccjaan/	
		mii-gacnjaan	kak-gacnjaan	ur-gacnjaan	ar-gacnjaan	
条件	B	mii-kka	kak-kka	ur-kka	ar-kka	
		E-i	mii-ruba	kak-i-ruba	ur-i-ruba	ar-i-ruba
助言	E-i	mii-ba	kak-i-ba	ur-i-ba	ar-iba	
理由	E-i	mii-ba	kak-i-ba	ur-i-ba	ar-iba	
継起	E-i	mii-i	kak-i-i	ur-i-i	ar-i-i	
		B	mii-tti	kak-tti	ur-tti	ar-tti
例示	E-i	mii-ttja	kak-i-ttja	ur-i-ttja	ar-i-ttja	
目的	B	mii-ga	kak-ga			
絶対否定	E-i	mii-dana	kak-i-dana	ur-i-dana		njaa-dana
条件否定	E-a	mii-dakara	kak-a-dakara	ur-a-dakara		njaa-dakara

6.2 コピュラ動詞

コピュラ動詞は主語の有生性の制限がない点と、異形態 *jar* を有する点において、存在動詞と区別できる。(53c) に示すように、名詞述語に焦点助詞 *=du* が付く場合、異形態 *jar* が現れる。

(53) a. *tarooja* *siitu.*

taroo=a *siitu.*

太郎=TOP 学生

「太郎は学生だ。」

b. *tarooja* *siitu*

taroo=a *siitu*

太郎=TOP 学生

「太郎は学生ではない。」

aran.

ar-a-n.

COP-THM-NEG.NPST

c. *tarooja* *siitudu*

taroo=a *siitu=du*

太郎=TOP 学生=FOC

「太郎は学生だった。」

jaataa.

jar-tar.

COP-PST

コピュラ動詞は、連結母音をとる点でクラス2の語幹に似ており、表52に示すように屈折する。ただ、定動詞の直説法非過去肯定の場合、コピュラ動詞が出現しないため、空欄にする。さらに、希求法と命令法において屈折しない。

表52 コピュラ動詞の屈折（空欄は「該当する形がない」という意味を表す）

クラス		1	2	コピュラ動詞
例		「見る」	「書く」	「である」
非連結語幹 (B _{basic})		mii	kak	(j)ar
連結語幹 (E _{xpend-a} , E _{xpend-i})			kak-a, kak-i	(j)ar-a (j)ar-i
定動詞				
直説法：				
直説法過去肯定	B	mii-tar	kak-tar	(j)ar-tar
直説法過去否定	E-a	mii-ttan	kak-a-ttan	(j)ar-ttan
直説法非過去肯定	B	mii-∅	kak-∅	
直説法非過去否定	E-a	mii-n	kak-a-n	(j)ar-a-n
副動詞				
条件	B	mii-kka	kak-kka	(j)ar-kka
	E-i	mii-ruba	kak-i-ruba	(j)ar-i-ruba
助言	E-i	mii-ba	kak-i-ba	(j)ar-iba
理由	E-i	mii-ba	kak-i-ba	(j)ar-iba
継起	E-i	mii-i	kak-i-i	(j)ar-i-i
	B	mii-tti	kak-tti	(j)ar-tti
例示	E-i	mii-ttja	kak-i-ttja	(j)ar-i-ttja
絶対否定	E-i	mii-dana	kak-i-dana	(j)ar-i-dana
条件否定	E-a	mii-dakara	kak-a-dakara	(j)ar-a-dakara

存在動詞やコピュラ動詞と同じ語彙的資源 (*ur, *ar) を共有する動詞として、状態動詞とアスペクト補助動詞がある。これらの動詞について、別の論文で改めて行うこととする。

7 おわりに

本稿は、南琉球宮古語新城方言の動詞形態論に対する網羅的な記述である。特に、連結母音を認める理由や、それぞれの語形に導かれる過程においてどんな形態音韻規則が適用されるかについて詳しく記述を行なった。しかし、この記述には課題も多い。以下、解決すべき課題について述べる。

まず、r語幹のri形がどう派生されてきたかを解明すべきである。

さらに、4. 1. 2節で前述した通り、c語幹がa連結母音をとる際、t語幹に交替する（例：//mac-a-n//（待つ-THM-NEG.NPST）→/matan/「待たない」）。その動機付けは何なのか、ま

だ不明である。

3番目の課題として、副動詞の屈折接辞（5.2.3節）のうち、2つの形を持っている接辞（同時接辞、条件接辞、継起接辞）が複数存在する。本稿において、それぞれの語形のみ整理したが、これらの形式はどのように使い分けられているか、まだ解明されてこれは言語（もしくは方言）接触によって生じるものなのかも追究すべき課題である。

4番目は、定動詞の直説法過去否定接辞-ttanについての分析である。この接辞における最後のnを、話者の確信と聞き手にとっての新情報を表す確信形（内間1984、下地2010、林2013、金田・下地2015、金田2015）に該当するものとしてみるか、より深く分析したい。

さらに、文法化した形が屈折接辞としてみるべきか、判断しがたいものがある。例えば、形式名詞gamataから由来する形式gamata（「～する予定」という確定未来の意味）や、pus「欲しい」というPC語幹から由来するbus（「～したい」という意味を表す）があり、これらは複合の後部要素としてみるか、接辞としてみるか、謎がまだ解けていない。

最後に、今回は70代の話者のみを対象にしたが、上の世代の話者も同じ活用体系を持っているか、調べる必要がある。

上記のことについて、これから詳細な調査と分析を行って、解明して行きたい。

（本稿をなすにあたって、以下の助成を受けている。

特別研究員奨励費「南琉球宮古語城辺新城方言の文法・語彙・談話の総合的記述を目指した3点セットの作成（特別研究員：王 丹凝）」（2019年度～2022年度；課題番号：19J20288）

参考文献：

- 青井隼人. (2012). 「南琉球宮古方言の音韻構造」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』 8 : 99-113.
- Bickel, B., & Nichols, J. (2007). Inflectional Morphology. In T. Shopen (ed.), *Language typology and syntactic description (III)*, Cambridge: Cambridge University Press (2nd ed.). Cambridge University Press.
- Dixon, R., & Aikhenvald, A. (2002). Word: a typological framework. In R. Dixon & A. Aikhenvald (eds.), *Word* (pp. 1-41). Cambridge University Press.
- Dixon, R. (2010). *Basic linguistic theory*. Oxford University Press.
- Haspelmath, M., & Sims, A. (2013). *Understanding morphology*. Routledge.
- 林 由華. (2013). 「南琉球宮古語池間方言の文法」博士論文, 京都大学.
- 平山輝男. (1964). 「琉球宮古方言の研究」『国語学』 56 : 61-73.
- 狩俣繁久. (1986). 「宮古方言の「中舌母音」をめぐって」『沖縄文化』 66 : 54-64.
- 狩俣繁久. (2018). 「多良間方言の「中舌母音」はどんな音か—青井隼人2012を検証する—」

- 『琉球アジア社会文化研究』 21 : 27-34.
- 金田章宏, & 下地賀代子. (2015). 「南琉球方言におけるベシ由来形の使用実態」『琉球の方言』 39, 141-164.
- 金田章宏. (2019). 「宮古語大神方言 動詞と形容詞の活用の概要」文化庁委託事業成果報告会. 東京, 2019年2月2日.
- 松岡 葵. (2021). 「福岡県柳川市方言の文法概説」修士論文, 九州大学.
- 宮岡 大. (2019). 「日本語における子音語幹動詞の形態構造 – 語幹拡張母音とする分析」卒業論文, 九州大学.
- Payne, T. (1997). *Describing Morphosyntax: A Guide for Field Linguists*. Cambridge: Cambridge University Press. <https://doi.org/10.1017/CBO9780511805066>
- ペラール・トマ. (2013). 「日本列島の言語の多様性：琉球諸語を中心に」田窪行則 (編)『琉球列島の言語と文化 その記録と継承』 81-92. 東京：くろしお出版. (<https://hal.archives-ouvertes.fr/hal-01289782>)
- 崎山 理. (1963). 「琉球宮古諸島方言比較音韻論」『国語学』 54 : 6-21.
- セリック・ケナン (2018) 「南琉球宮古語下地皆愛方言一簡略記述・談話資料・語彙集一」『言語記述論集』 10, 97-249.
- Shimoji, M. (2008). *A grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan Language* (Ph.D). Australian National University (published as Shimoji 2017).
- 下地理則. (2008). 「伊良部島方言の動詞屈折形態論」『琉球の方言』 32, 69-114.
- 下地理則. (2010). 「南琉球宮古伊良部島方言のm語尾終止形の機能」『琉球の方言』 34 : 193-208.
- Shimoji, M. (2013). Clitics in Irabu Ryukyuan. *International Journal of Okinawan Studies* 4 : 51-79.
- 下地理則. (2018). 『南琉球宮古語伊良部島方言』 東京：くろしお出版.
- Takubo, Y. (2015). *Issues in the verbal morphophonemics of Ikema Ryukyuan*. Presentation, Osaka: Phonology Forum, 2015. 8. 19.
- 高城隆一. (2020). 「鹿児島県大隅半島内之浦方言の音節構造」口頭発表, AA研第18回文法研究ワークショップ：「音節構造の諸問題」(Zoom開催), 2020. 10. 18.
- 田平 郁. (2018). 「南琉球宮古語新城方言の連体修飾構造」卒業論文, 九州大学.
- Thompson, S. (1988). A discourse approach to the category 'Adjective'. In J. Hawkins (ed.), *Explaining language universals* (pp. 167-210). Blackwell.
- 内間直仁. (1984). 『琉球方言文法の研究』 笠間書院.
- 上村幸雄. (2000). 「琉球語音声学の概説」『音声研究』 4(1) : 4-18.
- 王 丹凝. (2019). 「南琉球宮古語城辺町新城方言の文法概説」修士論文, 九州大学.

Zwicky, A., & Pullum, G. (1983). Cliticization vs. Inflection: English n't. *Language*, 59(3), 502. <https://doi.org/10.2307/413900>

略号一覧：

-:	接辞境界	INT:	意志-di
=:	助詞境界	LCTN:	推測
+:	複合	LIM:	限界格
1:	1人称	NEG:	否定
2:	2人称	NOM:	主格
ABL:	奪格	NPST:	非過去
ACC:	対格=u	PASS:	受身
ACC2:	対格=a	PC	property concept
ADT:	累加	POL:	尊敬
ALL:	方向格	POT:	可能
B	basic stem	PROG:	継続相
CAUS1:	使役-smi	PROH:	禁止
CAUS2:	使役-as	PRP:	助言
CND1:	仮説条件-kka	PST:	過去
CND2:	仮説条件-ruba	PURP:	目的
COP:	コピュラ	Q:	疑問
CSL:	理由	QT:	引用
DAT:	与格	RLS:	確信
E-a:	Expend stem-a	SEQ1:	継起形-i
E-i:	Expend stem-i	SEQ2:	継起形-tti
EXP:	例示	SFP:	終助詞
FOC:	焦点	SG:	単数
GEN:	属格	THM:	連結母音
IMP1:	命令-ru	TOP:	主題=a
IMP2:	命令-i	VLZ:	動詞化
INF:	不定		
INST:	具格		

『琉球の方言 45 号』掲載論文；王丹凝著「南琉球宮古語新城方言における動詞形態論」
 について、著者より以下の訂正がありました。

該当箇所		誤	正
P.174	23 行目	munuu	munu=u
P.175	2 行目	munuu	munu=u
P.178	3 行目	<i>agatagamaimai</i>	<i>agatagamimai</i>
	6 行目	<i>agatagamaimai</i>	<i>agatagamimai</i>
P.196	28 行目	ar-iba	ar-i-ba
	29 行目	ar-iba	ar-i-ba
	34 行目	E-i	E-a
	34 行目	kak-i-dana	kak-a-dana
	34 行目	ur-i-dana	ur-a-dana
P.198	10 行目	(j)ar-ttan	(j)ar-a-ttan
	15 行目	(j)ar-iba	(j)ar-i-ba
	16 行目	(j)ar-iba	(j)ar-i-ba
	21 行目	E-i	E-a
	21 行目	kak-i-dana	kak-a-dana
	21 行目	(j)ar-i-dana	(j)ar-a-dana